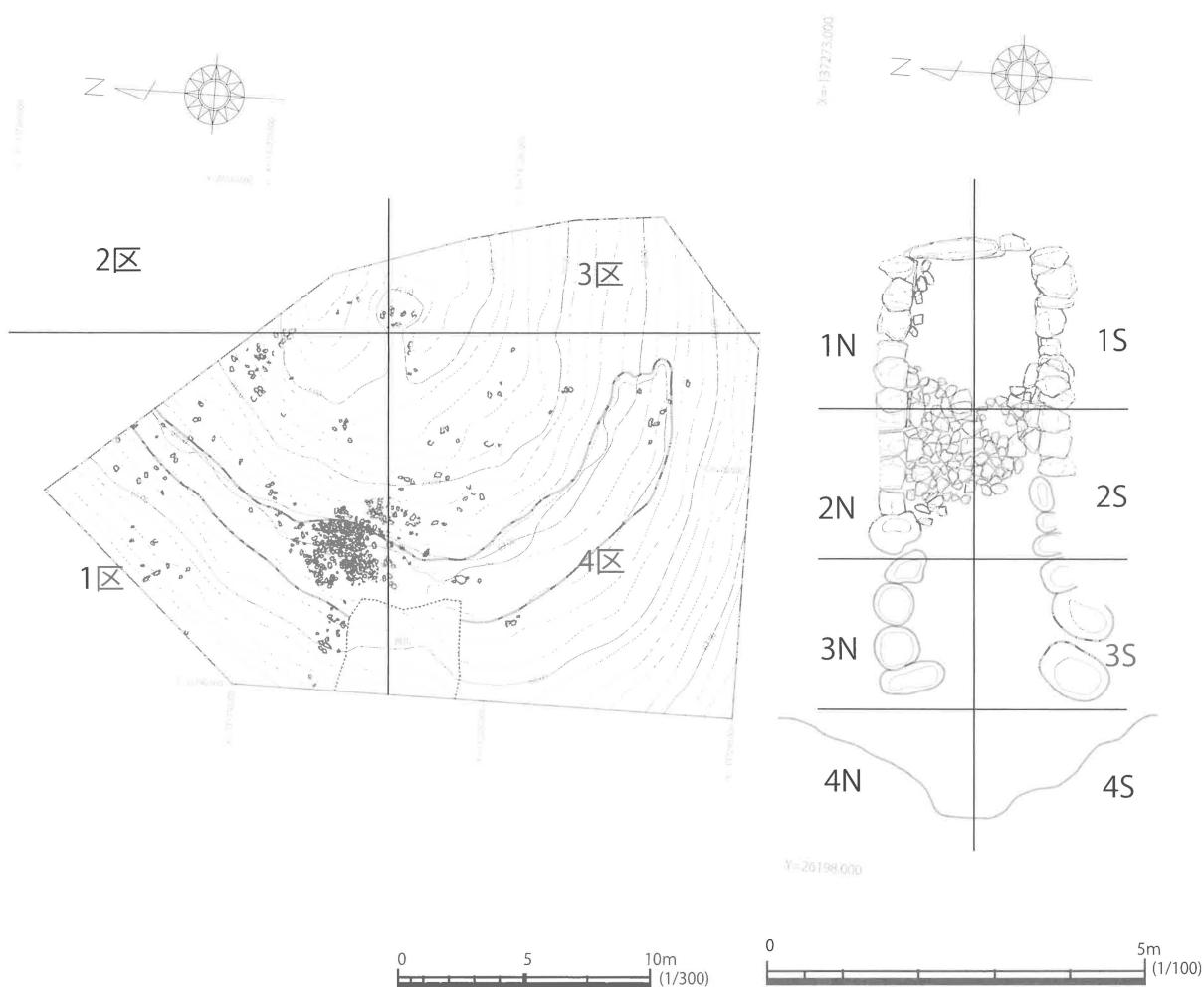


# 第5章 稲荷山2号墳

## 第1節 地区割の設定

稲荷山2号墳の地区割は、石室中央部と思われるところが調査開始前から陥没していたため、この部分を任意に墳丘地区割の中心点とした。この結果、墳丘中心点を奥壁から約1.2m西側で、石室右側壁の奥壁側から4石目の南側約0.65mに任意に設定した。石室中心線は、奥壁と両側壁を二分したN-85°58'-Eの東西線を任意の中軸線とした。これにより墳丘の分割区画(墳丘地区名)は、石室入口の北西を1区として時計回りに4区までの、第32図に示した4分割とした。また、石室内の分割区画(石室内地区名)は、任意に奥壁より2m毎に石室入口までの4分割に、さらにこれを石室中軸線で北Nと南Sに分割して第33図の8分割とした。



第32図 稲荷山2号墳墳丘地区割図

第33図 稲荷山2号墳石室内地区割図

## 第2節 基本層序

2号墳の基本層序を、第4表に示す。

1層は表土で、1-1層は有機物と角礫を含むシルト質細砂～粗砂の表土層である。

2層は角礫と有機物を含むシルト質粗砂やシルト混ざり粗砂の墳丘崩落土層で、2-1層は西側墳丘崩落土、2-2層は南側墳丘崩落土上層、2-3層は南側墳丘崩落土下層で、石室内攪乱後の堆積物である。

3層は角礫と多量の有機物を含むシルト質粗砂の周溝上祭祀遺構堆積土層で、3-1層は西側周溝上祭祀遺構石敷埋土である。

4層は大形の転石材( $\phi \sim 20\text{cm}$ )を混じえる角礫( $\phi \sim 2\text{cm}$ )を含むシルト質細砂～粗砂の周溝内堆積土層で、4-1層は西側周溝内堆積土、4-2層は南側周溝内堆積土、4-3層は北側周溝内堆積土である。

5層は角礫( $\phi \sim 2\text{cm}$ )を含むシルト質細砂の側壁・奥壁裏込埋土層で、5-1層は裏込石材( $\phi \sim 20\text{cm}$ )を混じえる裏込埋土である。

6層は角礫( $\phi \sim 2\text{cm}$ )を含むシルト質細砂の墳丘・石室構築土層2で、6-1層は石塊( $\phi \sim 20\text{cm}$ )と4段目構築土である。

7層は角礫( $\phi \sim 2\text{cm}$ )を含むシルト質細砂～粗砂の墳丘・石室構築土層1で、7-1～3層は角礫や腐植土を含む第3段目構築土、7-4層は角礫( $\phi \sim 3\text{cm}$ )を多量に含む第2段目構築土、7-5層はシルト質粗砂の第1段目構築土である。

8層は石室材である角礫( $\phi \sim 50\text{cm}$ )を多量に混じえるシルト質中砂～粗砂の石室内埋土層で、8-1層は石室内攪乱後流入土、8-2・3層は石室内攪乱後埋土である。

9層は多量の大形の角礫( $\phi \sim 20\text{cm}$ )を混じえるシルト質粗砂の石室内堆積土層で、9-1層は土の締まりが弱い1次床面堆積土である。

10層は角礫( $\phi \sim 2\text{cm}$ )を含む細砂質シルトの石室内堆積土層で、10-1層は土の締まりが弱い敷石間とその上層間を埋める敷石間堆積土である。

11層は大形の亜角礫～角礫( $\phi \sim 30\text{cm}$ )を混じえるシルト質粗砂の閉塞石間堆積土層で、11-1層は閉塞石間の柔らかい堆積土である。

12層は4層からなり、大形の亜角礫～角礫( $\phi \sim 20\text{cm}$ )を混じえる細砂質シルト～シルト質細砂の排水溝埋土層で、12-1・2層はシルト質細砂で、12-3・4層は細砂質シルトで上層ほどシルト化している。

20層はチャートの岩盤又はチャートの風化したシルトから成る地山層で、20-1層はチャートの岩盤が地殻変動により接触变成しシルトとなっていた。

石室並びに墳丘の構築土や堆積土を、奥壁の左側壁際を任意の中心とした分割線による東西の縦断面図と南北の横断面図を第34図に示す。なお、1号墳同様に基本層序としては土質の大きな変化が無い場合は、同じ遺構である場合に限り、同じ構築時期又は堆積時期の堆積物として扱う。

2号墳 標準層序

土層No.	旧土層名	大区分	小区分	層名	土色	備考	
1-1	表土層	表土	表土	落葉・根等の有機物と角礫を含むシルト質細砂	7.5YR3/1	多量の落葉を含む。	
2-1			西側墳丘崩落土	角礫(～φ20cm)と有機物を含むシルト質粗砂	10YR7/3	石室内擾乱後の堆積物。	
2-2	墳丘第1層	墳丘崩落土	南側墳丘崩落土上層	角礫(～φ20cm)と有機物を含むシルト質粗砂	10YR7/2	石室内擾乱後の堆積物。	
2-3			南側墳丘崩落土下層	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	7.5YR7/4	石室内擾乱後の堆積物。	
3-1	周溝上	祭祀遺構敷石間堆積土	西側周溝上石敷間堆積土	角礫(～φ20cm)と多量の有機物を含むシルト質粗砂	7.5YR5/2	祭祀遺構敷土。	
4-1			西側周溝内堆積土	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	7.5YR4/3	亞角礫～角礫(～φ20cm)の転石が入り込む。	
4-2	周溝第1層	周溝内堆積土	南側周溝内堆積土	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	7.5YR4/4	亞角礫～角礫(～φ20cm)の転石が入り込む。	
4-3			北側周溝内堆積土	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	10YR5/4	亞角礫～角礫(～φ20cm)の転石が入り込む。	
5-1	裏込め	側壁・奥壁裏込埋土	側壁・奥壁裏込埋土	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	7.5YR6/3	亞角礫～角礫(～φ20cm)の裏込め土が入り込む。	
6-1	墳丘第1層	墳丘・石室構築土2	石塊・4段目構築土	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	7.5YR7/1	亞角礫～角礫(～φ20cm)の転石が入り込む。	
7-1			角礫(～φ6cm)を含むシルト質細砂	7.5YR4/3	大形石材は含まず。		
7-2			第3段目構築土	角礫(～φ2cm)を多く含むシルト質混ざり細砂	10YR7/4	大形石材は含まず。	
7-3	墳丘盛土	墳丘・石室構築土1		角礫(～φ2cm)と腐食物を含むシルト質粗砂	2.5Y6/3	大形石材は含まず。	
7-4			第2段目構築土	シルト質細砂に角礫(～φ3cm)を多量に含むシルト質粗砂	7.5YR5/4	大形石材は含まず。	
7-5			第1段目構築土	角礫(～φ2cm)を含むシルト質粗砂	10YR7/4	大形石材は含まず。	
8-1			石室内	石室内擾乱後流入土	角礫(～φ10cm)と有機物を含むシルト質粗砂～シルト	7.5YR7/4	石室内擾乱後の流入土。
8-2	石室内	石室内埋土		角礫(～φ5cm)を多量に含むシルト質粗砂	10YR5/4	石室内擾乱後の投入土で石室材を多量に含む。	
8-3				角礫(～φ5cm)を多量に含むシルト質中砂～粗砂	7.5YR5/3	石室内擾乱後の投入土で石室材を多量に含む。	
9-1	石室内	石室内堆積土	1次床面堆積土	角礫(～φ20cm)を多量に含むシルト質粗砂	7.5YR7/2	大形の礫を多量に含む堆積土で、土の綿まりが弱い。	
10-1	石室内	石室内堆積土	敷石間堆積土	角礫(～φ2cm)を含む細砂質シルト	10YR4/6	敷石間とその上層を埋める堆積土で、擾乱されている。土の綿まりが弱い。	
11-1	閉塞石	閉塞石間堆積土	閉塞石間堆積土	角礫(～φ30cm)を含むシルト質粗砂	10YR5/2	亞角礫～角礫(～φ30cm)の閉塞石が入り込む。	
12-1				亞角礫～角礫(～φ20cm)を含むシルト質細砂	7.5YR6/4	排水溝の捨て石が多数含まれる。	
12-2	排水溝	排水溝埋土		亞角礫～角礫(～φ20cm)を含むシルト質細砂	7.5YR5/9	排水溝の捨て石が多数含まれる。	
12-3			排水溝埋土	亞角礫～角礫(～φ20cm)を含む細砂質シルト	10YR7/6	排水溝の捨て石が多数含まれる。	
12-4				亞角礫～角礫(～φ20cm)を含む細砂質シルト	7.5YR6/8	排水溝の捨て石が多数含まれる。	
20-1	地山層	地山	地山	岩盤又はシルト	5YR5/8	場所によってチャートの岩盤と接触変性した礫層やシルトの部分が見られる。	

第4表 稲荷山2号墳基本層序

### 第3節 遺構

#### 1. 墳丘及び周溝

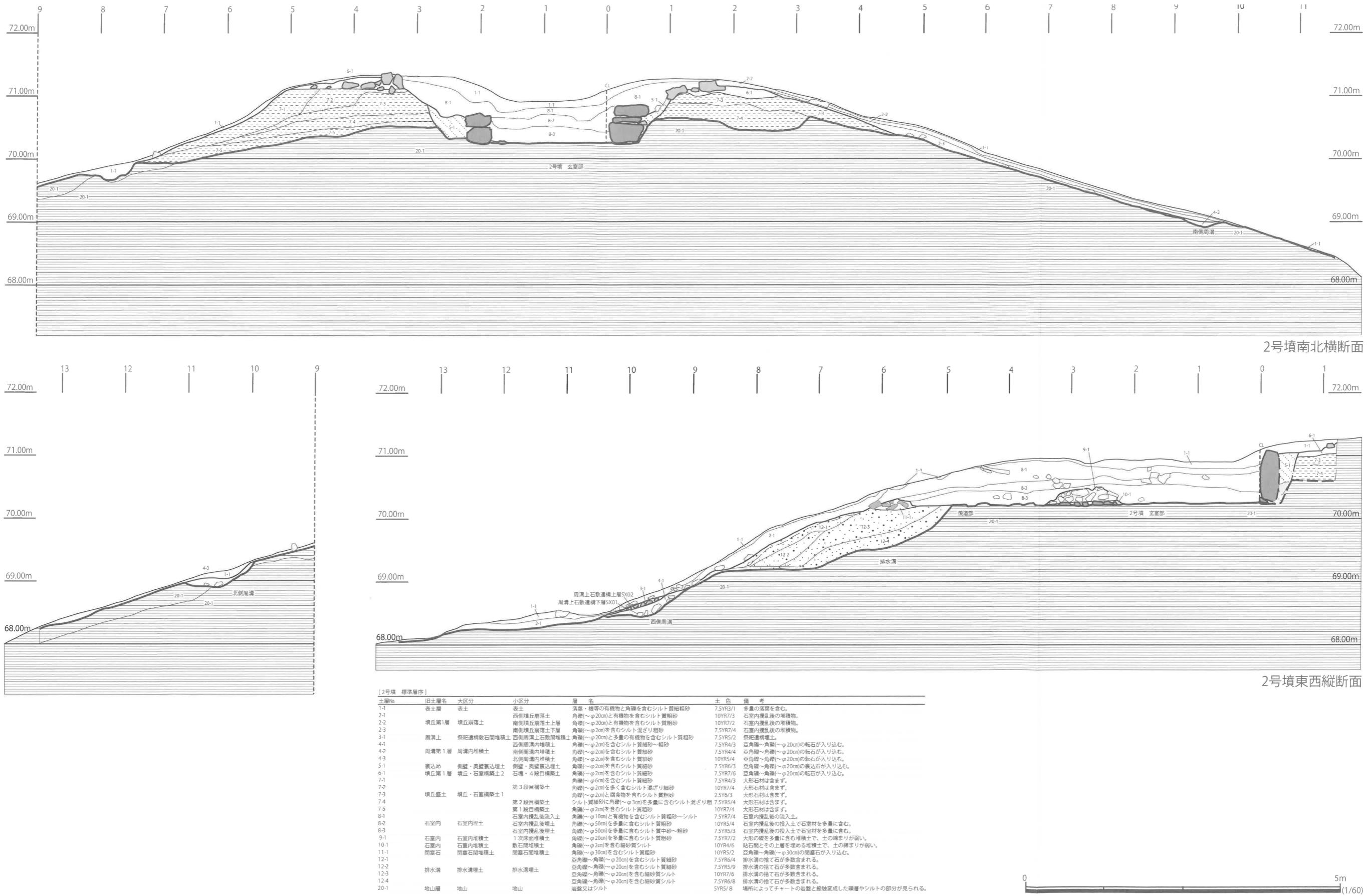
稲荷山2号墳は、西側に開口する無袖（式）と考えられる横穴式石室を主体部とし、東側と南側の一部を除く墳丘に溝を巡らせた円墳である。

##### 1) 墳丘規模

調査前の墳丘規模予想は、標高72.3mの尾根頂部から緩やかに南方向に下がり、約6°の極めて緩い傾斜地先端の標高71.0m付近に2号墳があり、古墳西側の裾は標高69.0m付近にあること、陥没している墳頂部は標高71.3mで高さ2.3m余りが残存していること、石室の残存状況は悪いようであるが1号墳よりも大きい直径20m余りの円墳としていた。ここでは、墳丘東側や東側周溝については、既に壊されて消滅していたため、先の平成13年度の調査において検出された2号墳の周溝の数値を用いて示す。また、現地調査にあたっては、調査区東側が極めて危険な断崖絶壁となっていたため、作業員等の安全のため崖際より1.8m西側からの調査に止めており、東側での伐採を含めた作業は一切行っていない。

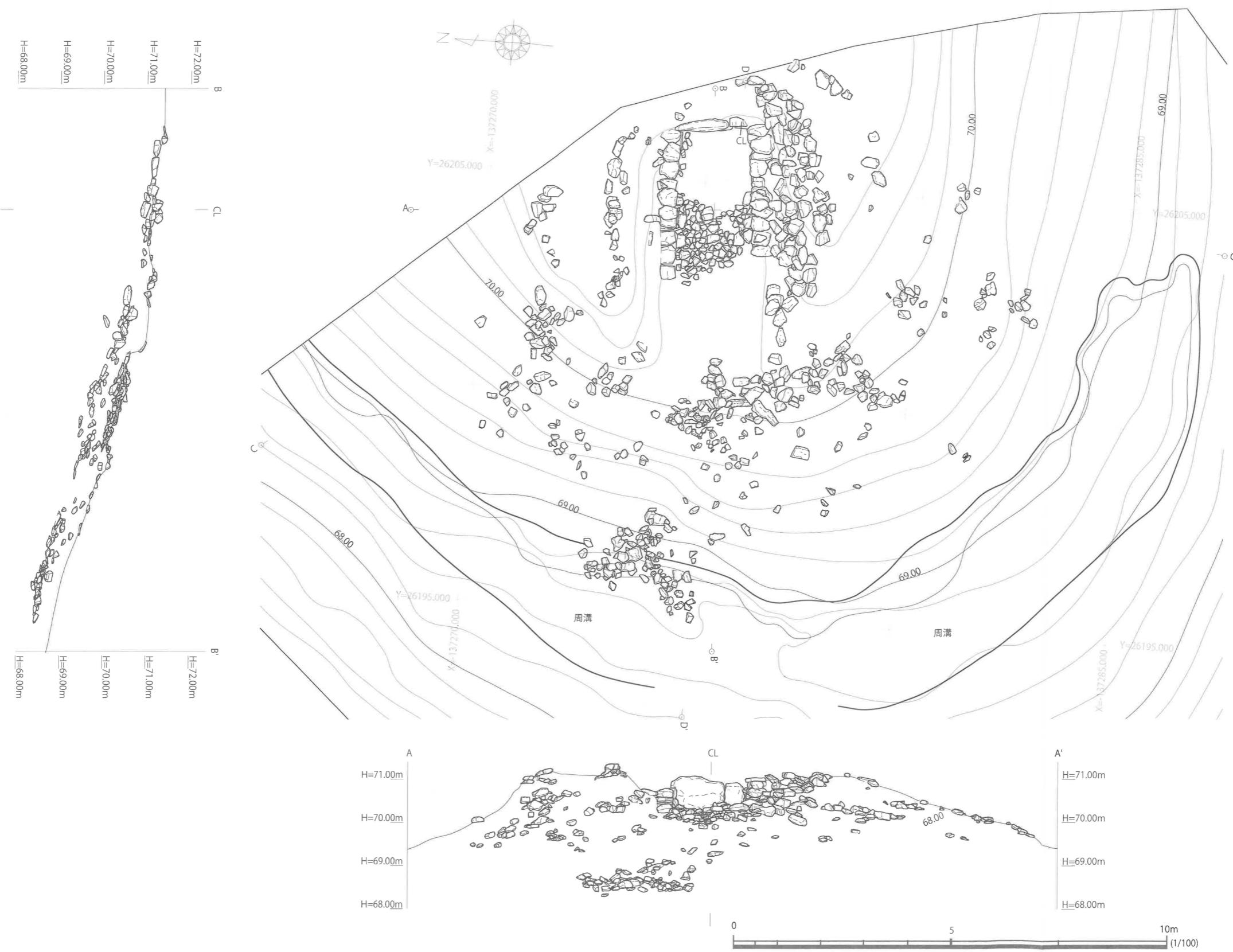
その墳丘規模は、第35図並びに1～4号墳復元平面図である第36図に示すように、やや南北に長い楕円形である。南北は南側周溝墳丘肩部から北側周溝墳丘肩部までは最大で約20.0mであるが、北側の未調査区や南側墳丘裾の周溝が確認できなかった未検出部分もあり、明確な数値ではない。東西は東側墳丘裾の周溝が確認できなかった未検出部分もあるが、西側周溝墳丘肩部から東側周溝墳丘肩部までは最大で約17.7mである。

周溝を含めた全長は、未検出部分や当初から無かったと思われる途切れる部分があるが、残存す



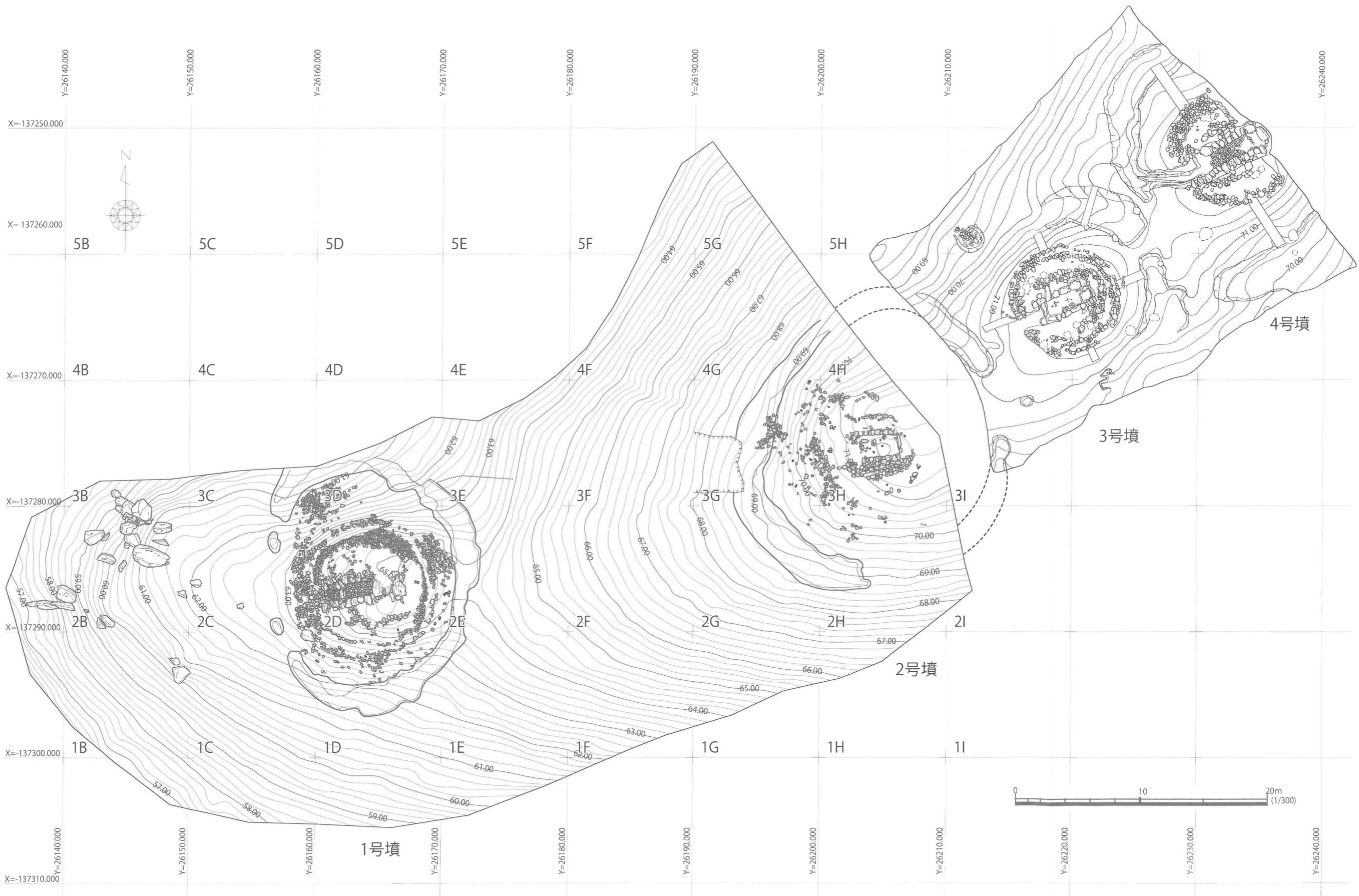
第34図 稲荷山2号墳墳丘断面図





第35図 稲荷山2号墳墳丘立面平面図







る東側の溝幅から北側周溝幅を1.1m、南側周溝幅を2.4mと仮定すると約23.5mに復元される。東西は西側周溝の攪乱部分等もあるが、東西約22.4mである。この様に、石室は尾根上にあって、墳丘はその急激に落ちる北側の谷とやや緩やかに落ちる南側の谷に規制され広がって、1号墳同様に南北に長い楕円形となっている。

この南北に長い楕円形墳丘の残存高は、最高所で標高71.65m、石室西側開口部の墳丘裾の標高が69.0m余りで、約2.65mの比高差である。しかし、尾根高所側の東側周溝途切れ部では標高69.4mであり比高は約2.25m、南側周溝墳丘肩部では標高69.2m余りであるから比高は約2.45m、北側周溝墳丘肩部では標高69.1m余りであるから比高は約2.55mとなる。

## 2) 墳丘構造

表土層(1層)を除去した段階で、第37図の様に、西側の墳丘裾に多数の石が散乱していること、墳丘部にも0.1～0.2m大の石が北西側斜面と南西側斜面に散布していることが明らかとなった。しかし、南斜面では、周溝の溝底が僅かに残るのみで途切れているばかりか、石の散布も僅かしか確認できず、斜面の状況からも流出したように思われた。

墳丘構造は、1・3号墳のような墳丘内に埋没する複数の石積を設けるものではなく、現況で確認できるのは奥壁の1段目の構築終了段階までは一般的な墳丘盛土のみで、この盛土上面に楕円形に石を敷き並べる以外に大きな特徴は見出せないものである。

墳丘斜面の角度は、南側墳丘斜面が15°、北側墳丘斜面が16.5°、西側墳丘斜面が29°で、北側墳丘斜面では墳丘盛土に近づくと急に49°に立ち上がる。

石室開口部の南側から北側にかけてみられる葺石状の石敷は、石列を伴うものではなく、丁寧に面を揃え敷き並べた「葺石」とも少し異なるものであるが、墳丘斜面に置かれた石敷として葺石を用いる。

これらの石室や墳丘に使用された石は、全てこの稲荷山を始めとする隣接の山々で産する、風化したチャートを用いており、他の石は使用していない。

### (1) 蔽 石

石室開口部の南側である4区を中心に、北側1区にも僅かに葺石が確認できるが、3区には確認できない。墳丘斜面の保護、崩壊を防止することを目的とする石敷と考えられる。なお、石室開口部西側墳丘裾の周溝上の石敷SX02は、中世の祭祀に伴うものと考えられるものであり後述する。

残存状況が比較的良いのは、1区の一部と4区の一部で、開口部を中心とする。その施工は、石の面を揃えて敷き並べたものではなく、雑然としていてどの様に落下防止を行ったのかも不明である。

使用した石の大きさは、最も大きなものは4区の長辺0.38m×短辺0.23m×厚さ0.2mであるが、平均的には長辺0.1～0.2m×短辺0.1～0.2m×厚さ0.1m余りのものを多用している。

### (2) 周 溝

墳丘の裾には、周溝が存在する。

周溝は現況では一巡しておらず、南側にはみられない。当初から存在しなかったのかは確証がな

い。但し開口部や石室背後が途切れたり背後の見えないところが拡張されてたりするのとは違い、溝の施工をして全周させないことの意味を探す方が難しく、残存する溝にも浅いものが多いことから、当初は石室背後約4.7mを除き全周していたと考えたい。

規模は先の墳丘規模で示したように、南北墳丘幅が約20.0mに、北側周溝幅を1.1m、南側周溝幅を2.4mと仮定すると約23.5mとなる。東西は石室入口である西側開口部下の西側周溝幅約3.5mに、東西墳丘幅が約17.6m、東側周溝（平成13年度調査「南側周溝」）の幅約1.3mを加えた約22.4mとなる。周溝の深さは、斜面地であり数値を上げにくいが、周溝外形側で当初は0.1～0.3m余りの深さであったと思われる。

周溝の堆積土については、基本的には周溝内堆積土である4～1～3層の、角礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）を含むシルト質細砂～粗砂層に石敷の亜角礫～角礫（ $\phi \sim 0.2\text{ m}$ ）が入り込むものである。

### （3）西側周溝上石敷遺構 SX01・SX02

石室開口部西側墳丘裾の西側周溝上において検出された遺構で、上下2層からなる。上下層共に祭祀に係わる遺構と考えられる。第38図に平面図を示す。

下層SX01は、西側周溝底の墳丘裾に沿って横長の幅約3.4m×縦約2mの範囲に、長さ0.1～0.3m×幅0.1～0.2m×厚さ0.05～0.2m余りの平石を40個余り敷いた石敷部分と素掘りのままとした部分から成る。この部分では、東側の墳丘斜面にも溝底から約1mの高さまで石敷を行っているように思われる。

堆積層は他の周溝と同じ4～1層の、角礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）を含むシルト質細砂～粗砂層に石敷の亜角礫～角礫（ $\phi \sim 0.3\text{ m}$ ）が入り込むものである。

出土遺物には須恵器の短頸壺1点、壺蓋4点、壺身4点等が、割られた状態で出土している。

上層SX02は、SX01上に4～1層の堆積が終了してからその上に作られた別遺構の石敷で、墳丘裾に沿って横長の幅約4.7m×縦約1.3mの範囲に、直径約1.0～1.2mの楕円形部分に小石で枠をし、その中に小砂利（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）を敷いた部分と、長さ0.1～0.2m×幅0.05～0.15m×厚さ0.05～0.1m余りの平石を60個余り敷いた部分、素掘りのままとした部分から成るものである。東側の墳丘斜面にも底辺2.1m×高さ1.1m余りの三角形に、石敷を行っているようにみえる。

堆積層は、角礫と多量の有機物を含むシルト質粗砂の西側周溝上祭祀遺構堆積土層である3～1層で堆積する。

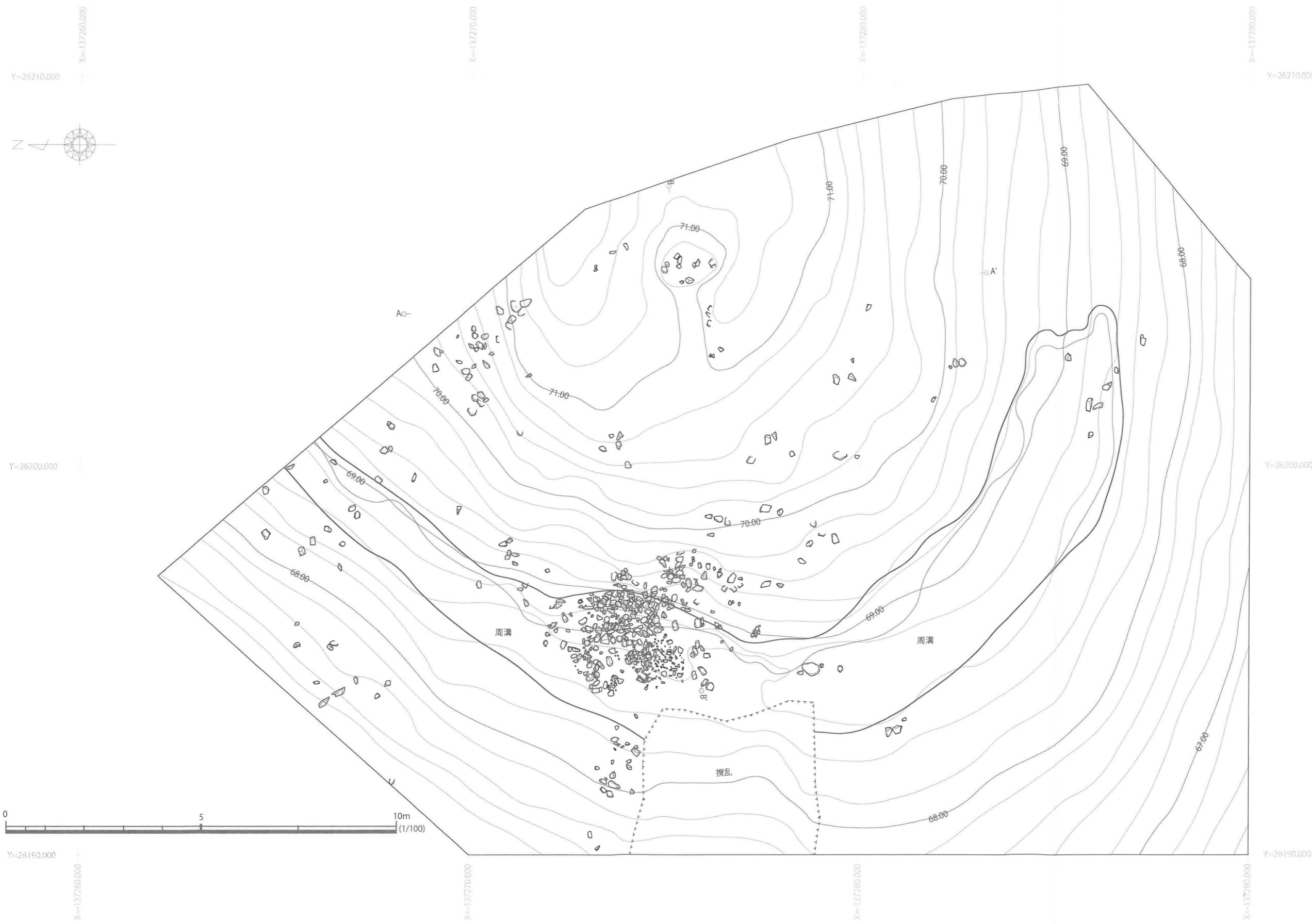
出土遺物には古瀬戸瓶子が2点、割れた状態で出土している。

なお、時代が異なるにもかかわらず同様な祭祀遺構が同じ場所に作られた背景には、SX01については、2号墳の石室開口部の1.8m直下であるという位置、またSX02については、暗渠排水溝から染み出していた水と何等かの関係があったのではないかと想像される。

### 3) 墳丘・周溝出土の遺物

表土層1～1層及び墳丘崩落土層2～1～3層からは、古墳時代から中世までの遺物が出土している。

第39図は出土遺物の地点取上げ図であるが、幾つかの遺物集中地点を上げることができる。北

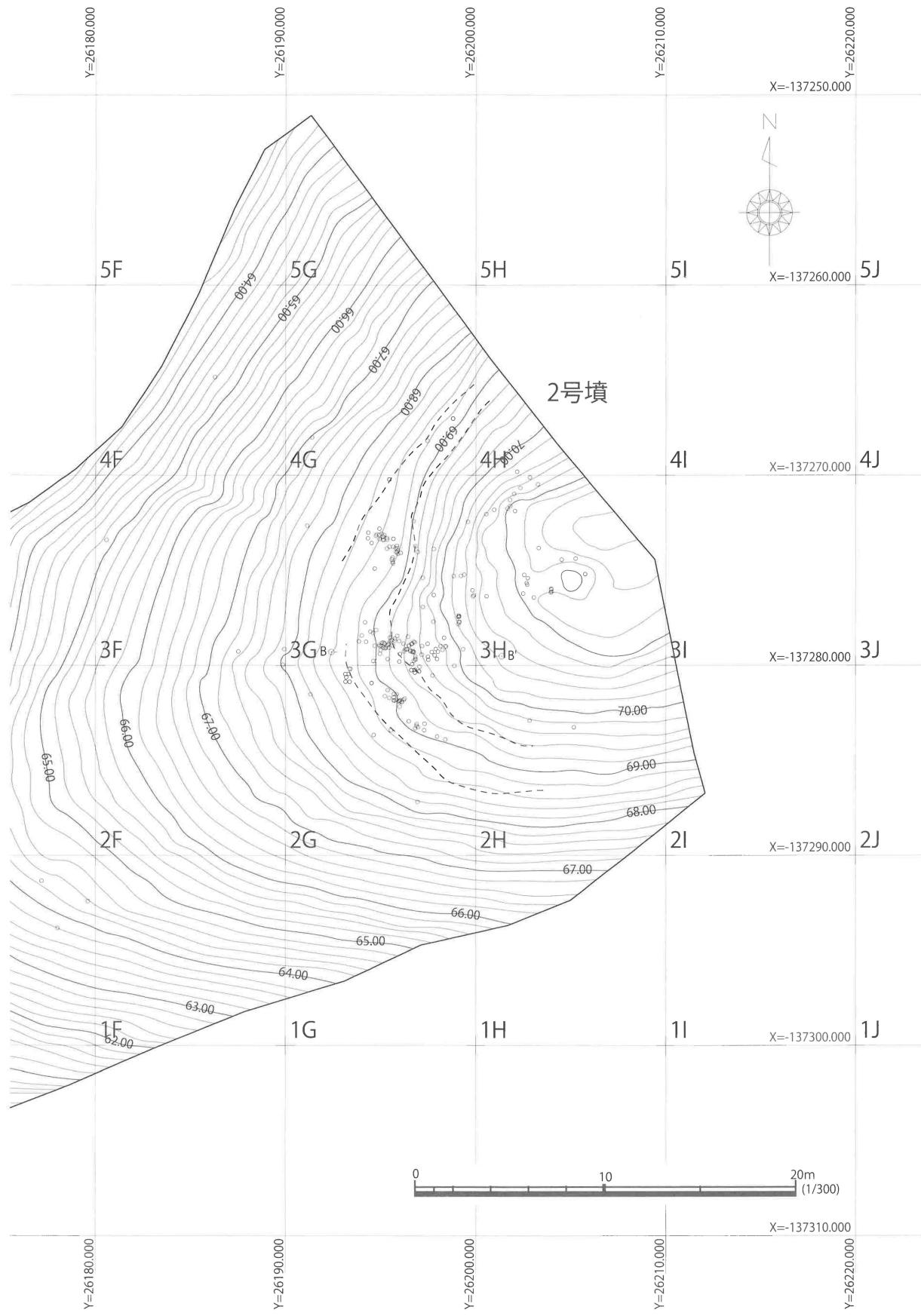


第37図 稲荷山2号墳表土層除去後平面図





第38図 稲荷山2号墳西側周溝上石敷遺構下層SX01・上層SX02平面図



第39図 稲荷山2号墳取上遺物分布図

側1区では3Gグリット中央の石室開口部西側墳丘裾の周溝上石敷遺構SX01・SX0201、南側4区では北側1区境の3Hグリットの石室開口部羨道部付近、2G・3Gグリット間の墳丘南西側斜面にかけてが濃い出土遺物散布地となっている。また、北側1区の3Hグリット北側の墳丘北側斜面にも、薄い出土遺物散布地がみられる。

以下には、墳丘出土の土器の2時期分けと、その接合関係から明らかとなった点について記述する。

### (1) 古墳時代の遺物分布状況

#### [墳丘南西側斜面]

墳丘南西側斜面と周溝、さらに周溝外斜面にかけての遺物は、第39図の平面分布図からも明らかなように、石室開口部(前庭)からの散布範囲は西南西への最大長7m×最大幅6mで、落差は標高68.6～70.4m付近の1.8mに及ぶもので、特に遺物出土密度が高い範囲は西側に集中している。第40図の垂直分布図からは、表土層1層の表面からも僅かで、地山層20層直上からもほとんど無く、墳丘崩落土層である2層中の中間に浮いたような出土位置であることが観察される。このことから、これら遺物群は墳丘築造当初の遺物群ではなく、二次的に運ばれた遺物群であることを示すものである。

出土している遺物は、第41図に見られるように、古墳時代の遺物は全て須恵器である。金属製品や装飾品の出土はない。図化できた須恵器には、壺Gの715壺身、壺Hの706壺蓋、720有蓋短脚無窓高壺、716有蓋高壺の蓋、717～719短脚高壺の脚部、721有蓋高壺の壺部などがある。この内、最も広範囲に分布するのは720有蓋短脚無窓高壺の最大長4.5m×最大幅5.3mと、706壺蓋の最大長8.2m×最大幅2.0mである。特に706壺蓋は、前庭の闕石脇から4点と南西周溝内から2点が出土している。

この南西側斜面と周溝、さらに墳丘外斜面の遺物は、石室内を攪乱した際の掘削土と共に土器を捨てた場所と考えられる。しかし、これらについても、確実に攪乱の際の排土中の遺物ばかりとは限定できない部分があり、祭祀に係わるものである可能性も残されている。

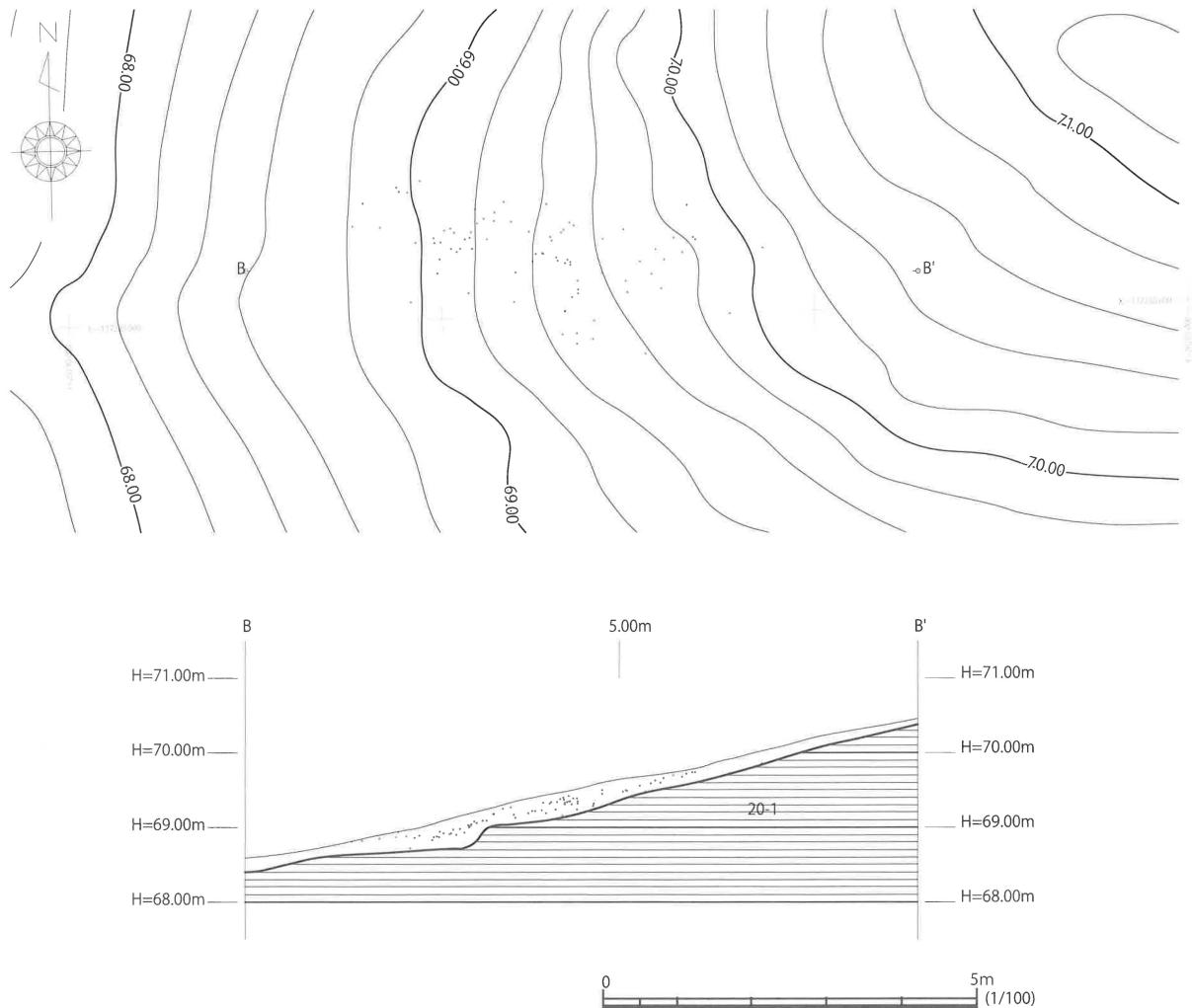
#### [石室内]

墳丘南西側斜面の分布とも少し被る分布を示すものもあるが、第41図の石室内である玄室部・羨道部と前庭周辺において分布を示すもので、出土層は石室攪乱後の埋土層である8層と西側周溝内堆積土層の4～1層である。出土遺物は全て須恵器である。図化できたものは、705甌、707壺蓋、711壺身、077甌がある。

玄室部・羨道部からは705甌、707・708壺蓋、077甌が出土し、前庭からは706・707壺蓋、711壺身が出土している。特に、707壺蓋は西側周溝上石敷遺構下層SX01・羨道部・前庭の3箇所から、711壺身は西側周溝上石敷遺構下層SX01・前庭の2箇所から、706壺蓋は前庭と墳丘南西側斜面から、708壺蓋は西側周溝上石敷遺構下層SX01・玄室部の右側壁上の2箇所で破片が出土している。

705甌は口縁部の破片で、その分布は羨道部上の攪乱後の埋土層である8層からの出土で、5片に分かれ玄室部から羨道部と左側壁にかけて出土している。

077甌は、1号墳の南側斜面の第3重石積と周溝肩の第1重石積の間を中心に執り行われ、南側



第40図 稲荷山2号墳墳丘西南西側斜面水平垂直遺物分布図

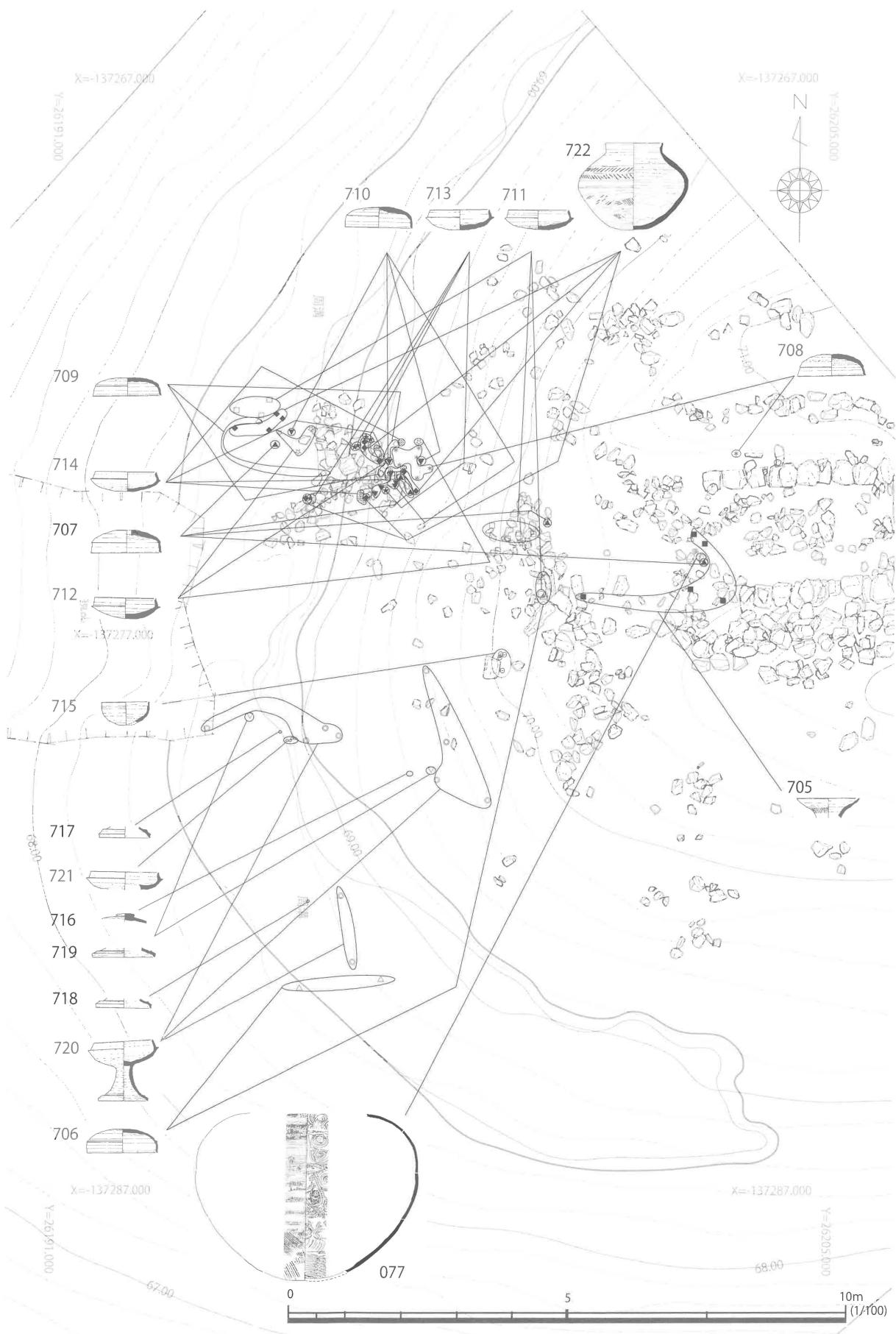
墳丘斜面・南側周溝内・墳丘外南側斜面にかけて破碎した甕を撒いた祭祀に用いられた甕である。

この甕の破片が、羨道部の攪乱後の埋土層である8層から、1点ではあるが出土している。攪乱層の中ではあるが、その出土地は石室内にあったものとみられるので、単に1号墳で採集した破片を開口していた2号墳で捨てた者がいたのか、1号墳の祭祀に用いた破片を何等かの意味があって2号墳に持ち運んだ者がいたのかなど、色々と推論できるがその意味するところは明らかにできない。

玄室部や羨道部、その両側壁周辺から出土した遺物については、石室内の攪乱により掘り出された遺物である可能性が高い。これに対し、祭祀遺構と考えられる西側周溝上石敷遺構下層SX01と前庭に同じ土器の破片が出土したことは、同時に行われた墳丘外と石室への入口である前庭において、墓前儀礼が執り行われたことを示す遺物であると考えることができる。

#### [西側周溝上石敷遺構下層 SX01]

西側周溝上石敷遺構下層SX01は、第40図の墳丘西側裾に集中して分布を示すもので、遺物は全て須恵器である。出土したものには、722短頸壺、707～710壺蓋、711～714壺身等がある。この内、接合してほぼ完形品と成了ったものは、722短頸壺、707～710壺蓋、712・714壺身で、確実にこ



第41図 稲荷山2号墳古墳時代遺物分布図

こで割られたことを示す。

土器の破片は細片化して散乱していて、割れたそのままの状態では出土していない。これらの行為は、722 短頸壺や他の壺身・壺蓋も SX01 の範囲内で出土していることから、2号墳のまさしく墓前で行われた祭祀終了後に土器を破碎した儀礼であったと考えられる。土生田(1995)はこれを「墓前儀礼」とし、古墳築造前、古墳築造の諸段階、さらに葬送時の諸段階で行われ、弥生時代以来の日本の伝統的な儀礼であるとした。2号墳におけるこの様な遺構は、先に調査された3号墳の墳丘南側裾の須恵器の壺身・壺蓋が多数出土したSX-1や、4号墳の排水溝に須恵器の壺身・壺蓋・高壺の完形品の入ったSX-1、開口部西側近くの北側周溝の須恵器の壺身・壺蓋のセットが出たSX-2、墳丘南側の須恵器供獻具を中心とした土器群であるSX-3でも、平成13年度の調査において検出された2号墳東側の北側周溝の須恵器土器群などもこの儀礼に係わるものと判断される。2号墳の西側周溝上石敷遺構下層SX01も土器の破碎を伴っており、葬送儀礼の所作と理解されるものである。1号墳における東側斜面や南側斜面での「大甕撤饌の作法」もまた、2~4号墳には甕を用いた儀礼は確認されていないが、葬送時の儀礼の一つである。

## (2) 中世の遺物分布状況

### [西側周溝上石敷遺構上層SX02]

西側周溝上石敷遺構上層SX02は、第42図の墳丘西側裾のSX01上に作られた別遺構で、731と732の古瀬戸瓶子を出土している。いずれも口縁部を欠く。

731古瀬戸瓶子の破片は、墳丘裾下を中心に石敷上ばかりではなく東側の墳丘斜面にまで分布していて、破碎して撒かれた可能性が高い。732古瀬戸瓶子の分布も、SX02と後述する墳丘北西側斜面に分かれて出土していて、どの様な理由により同一個体の破片が分かれて出土することになったのか、後代の人間の関与も含め不明な点があるが、1号墳における平安時代中期の完形土器が残る祭祀の在り方とは、その様相が異なるものであることは確かなようである。

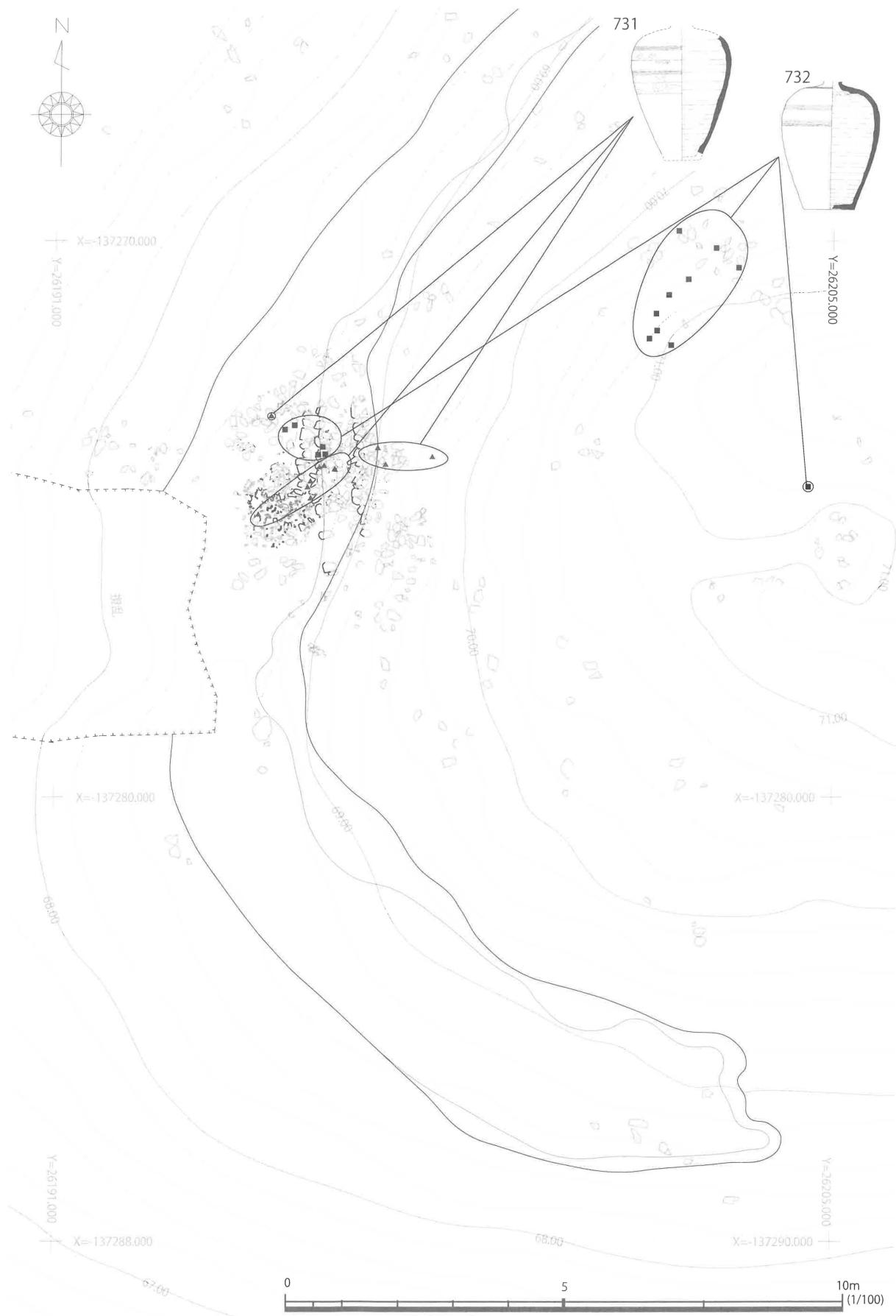
### [墳丘北西側斜面]

石室開口部から北西に4m余りの標高70.2~71.0m付近の墳丘斜面において、南北2.3m×東西1.5mの範囲に、先のSX02の732古瀬戸瓶子破片5点と接合する破片9点と、石室上部の攪乱層からも破片が1点出土している。出土の在り方は、先述の如く祭祀に係わるものと思われるが、その性格は不明である。

## 2. 主体部

主体部は、石盜りが目的と考えられる攪乱が激しいため推論が多くなるが、西側に開口する明瞭な袖を持たない無袖(式)の横穴式石室と考えられる。石室は天井石を伴う玄室部と短い羨道部、それに僅かに前庭をもつ構造と考えられる。その平面形状は石室開口部にやや広がる奥に長い長方形で、玄室部と羨道部の間に段構造はみられないが、石室開口部に闕石が残存しており、これを境に石室内と前庭を分けている。

なお、奥壁から石室開口部までに右側壁で3.4mまでに2段、左側壁で2.9mまでに4段までしか側壁が残存していないため、開口部までの間は主に側壁材の抜き取り痕で推測した。この結果、



第42図 稲荷山2号墳中世遺物分布図

右側壁では基底石の奥壁から9石目のみが石室内側に約0.3m入り込んでいること、同じように左側壁では基底石の奥壁から10石目までが石室内側に次第に迫り出し、11石目で石室外側に同じ約0.3m下がっていることが確認された。このことから、右側壁では基底石の奥壁から9石目と左側壁では基底石の奥壁から10石目に、その数値は不明であるが、側壁石積の違いや石敷の有無にて機能を分けていた可能性を残すものである。なお、右側壁と左側壁の抜き取り痕の状態が違うこと、抜き取り痕の深さに変化がないこともあり、擬似両袖(式)とはならないようと思われる。さらに、羨道部に据え置かれた最も西側の開口部の石材の抜き取り痕は、右側壁・左側壁共に基底石の奥壁から12石目で、これも先と同様に石室内に迫り出しており、羨門の様な形状を作り出していた可能性が高いと思われる。これらの推定により、玄室部の法量は奥壁から9石目の抜き取り痕(以下、「玄室部西側」という。)までの数値を使用し、羨道部の法量は石室開口部の闕石までの数値を使用した。また、石室の部分名称についても、狭義の前庭の用語を本来用いるべきところもあるが、不明確な点も多いため全て闕石までを羨道部とし、それよりも西側開口部を前庭と記述する。

## 1) 石室規模

### (1) 玄室部

玄室部の規模は、第43図に示すように、奥壁から右側壁基底石の9個目までの玄室部長は約3.95m(右側壁推測下端幅約3.90m、玄室部中央推測下端幅約3.86m、左側壁推測下端幅4.01m)、玄室部幅は約1.57m(奥壁側下端幅1.47m、玄室部中央下端幅1.72m、玄室部西側推測下端幅約1.77m)で、開口部側に広がる長方形である。

床面の敷石は玄室部に2／5余りを残すもので、比較的丁寧に平らな平石により床面を作っていて、上面の高さは標高70.30～70.36mである。

床面の傾斜は、横断面は中央下がりの緩い傾斜で、その高さは奥壁際で標高70.29m、玄室部西側付近で標高70.23m、闕石際で標高70.12mであり、1°余りの傾斜で西側開口部に緩く傾斜している。

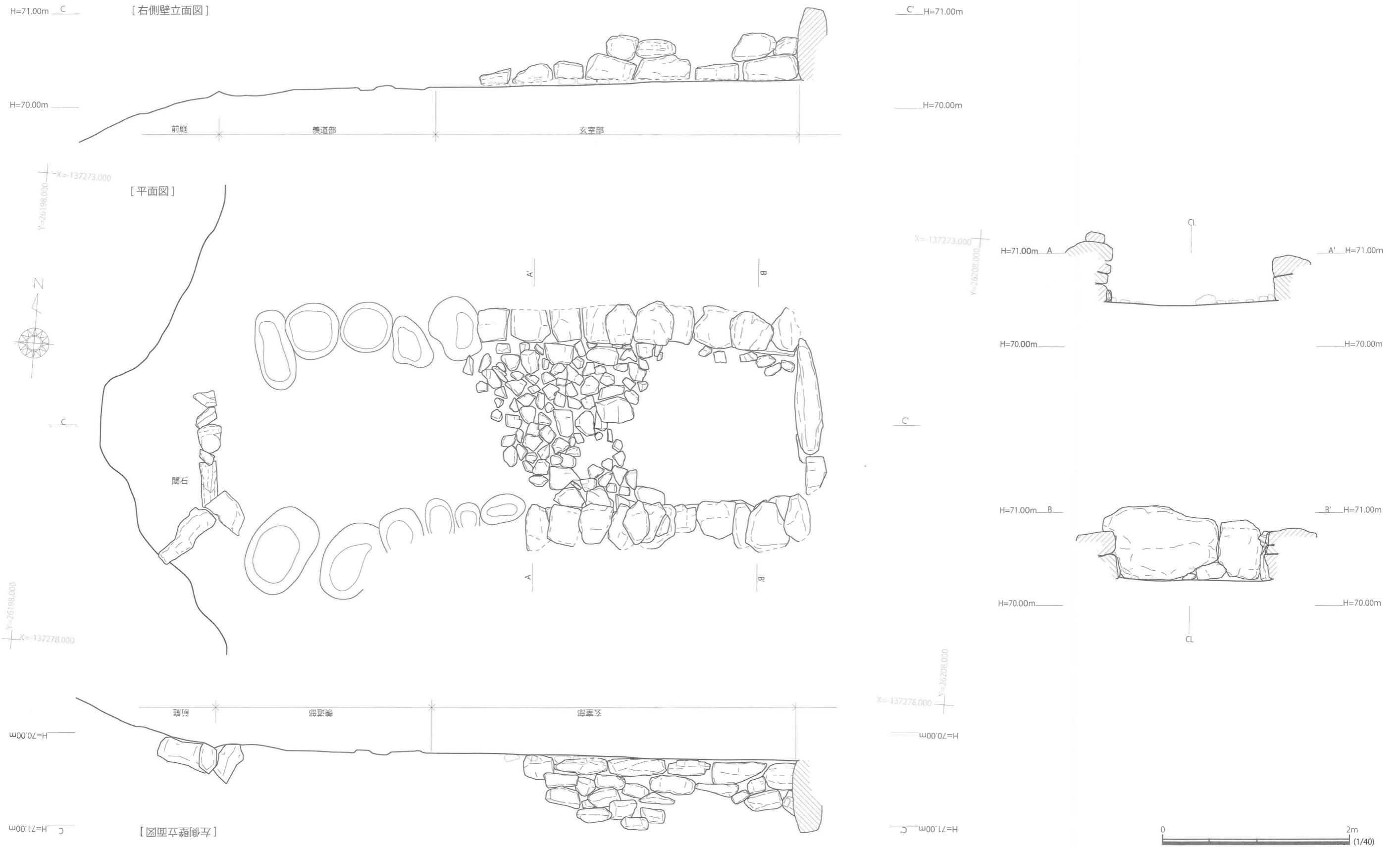
玄室部の縦断面の形状は、残された奥壁のみとなるが、ほぼ直角に立ち上がっている。これに対し横断面の形状は、側壁の持ち送りの傾きが、側壁下端から奥壁側B-B'では垂直もしくは上広がり気味で、玄室中央A-A'では右側壁が内側に4°余り、左側壁では内側に5°余り傾いていて、おそらく上部では上段天井近くでさらに狭める台形としていたと思われる。

玄室部の開口方向は、凡そN-94°2'-Wである。

### (2) 羨道部

羨道部は、開口部から側壁石の全てを失っている。このため、羨道部左側壁と羨道部右側壁についても、玄室部左側壁と玄室部右側壁の延長線上にあったと推測して記述する。床面については現状では土間であるが、玄室部境の構造も含め明らかでない。

羨道部の規模は、闕石から想定される羨道部長が約2.32m、幅約1.83mである。側壁材の抜き取り痕から推定される玄室部西側の下端幅は約1.47mである。推定される開口部の下端幅は1.23m以下である。



第43図 稲荷山2号墳石室立面平面図



右側壁・左側壁基底石の奥壁から12石目と闕石までの間である0.35m余りには、側壁材の抜き取り痕は残っていないが、小形の石材を積んで側壁としていた可能性が高い。

闕石の付近に僅かではあるが上面を整えた敷石が、9石余り残る。羨道部全体に当初からあったのか、それとも軟弱な暗渠排水溝の上面のみを覆ったのかは不明であるが、敷石上面高と床面の高さが同じであることから、後者の可能性が高いように思われる。

闕石は、石室に対して真横に置かれるものが4石残存する。4石の延長は、長さ1.23m×幅0.18～0.28m×高さ0.25～0.31mである。推測される闕石の横幅は、中心軸による復元から約1.8mと考えられる。

羨道部の開口方向は、玄室と同じ凡そN-94°2'-Wである。

### (3) 前庭

前庭は、最も南端の闕石からハの字に開いて開口していたものと考えられる。開口角度は、玄室部主軸から左側壁側に凡そ44°、両側では88°に開いていたものと思われる。西側開口部は僅かで崩落する墳丘斜面となっているが、その残存する前庭長は闕石を入れ約1.23mである。広がった残存最大幅は約2.4mである。崩落部は、奥壁から約8m西側で墳丘傾斜角度が異なるため、この部分までが崩落部分と考えられる。

左側壁延長上に1石のみ残存する基底石(縁石)の大きさは、長さ約0.73m×幅約0.27m×高さ約0.26mの細長い角柱で、縁石としての利用であったと考えられる。

前庭の上には粗い施工ではあるが、敷石が50石余り残存している。これについては、軟弱な暗渠排水溝の上面ばかりではなく南端まで存在するので、全面に施工されていた可能性がある。

2号墳では、この敷石上において土器の出土があり、この敷石が祭祀目的で築造当初から計画的に作られたことを示すものである。

## 2) 石室の配置と築造計画

墳丘の南北長に対する墳丘中心点は、北側墳丘肩部から南側墳丘肩部までが約20.0mであるから、中心は約10.0m地点となる。墳丘の東西長に対する墳丘中心点は、西側墳丘肩部から南側墳丘肩部までが約17.7mであるから、中心は約8.85m地点となる。この位置は、不定型な墳丘の中にあっては1地点に定まらないが、石室内に墳丘中心点は無く、右側壁内に墳丘中心点が存在する。

石室の各部の数値は、攪乱も大きいため正確な数値が出ないが、推定玄室部長が3.95m、推定羨道長が2.32mで、奥壁から闕石内側までの長さは6.27mとなる。前庭は、斜面による崩落が想定されるが、現状で1.23mである。これらから石室長は、現況で約7.5mとなる。幅は奥壁側下端幅1.47m、闕石の復元幅が約1.8mで、開口部に広がっている。

これらから導かれる玄室部幅1.57mは、玄室部長+羨道部長6.27mの約4倍である6.28mに極めて近い、施工誤差の範囲にある数値である。また、玄室部長3.95mは2.5倍、羨道部長2.32mは1.5倍にあたる。残存する石室長7.5m(羨道部長3.95m+羨道部長2.32m+前庭長1.23m)は、4.77倍となる。奥壁から、西側周溝肩部までは約10mであるから、これは南北墳丘長の半分の数値であるが、東西墳丘長の17.7mからは8.85mが半分の数値であるから、1.15m余り石室内に中心点

が入っていることになる。

ここで2号墳についても、1号墳同様に古墳築造企画の基準となる尺度が存在するものとする。その玄室部計測値から概観してみた場合、その1尺は1号墳とほぼ同じ26.166cm余りに換算される。この単位による各部の尺度は、第44図に示す方眼(細い方眼ライン=0.261m、太い方眼ライン=0.261×3倍=0.784m)のように、玄室部幅(奥壁下端幅)1.57mは6尺に、推定玄室部長3.95mで15尺に、推定羨道部長は2.32mで9尺に、これにより玄室部長+羨道部長6.27mは24尺に換算される。残存する石室長7.5mは、28.7尺となり端数となる。このため、崩落した西側前庭を復元する形で補うならば、30尺の7.83mが最も可能性の高い数値かと考えられる。

墳丘についても平面数値では東西墳丘長17.7mは68尺余りに、南北墳丘長20.0mは(76)尺余りに換算できる。

### 3) 石室の構造と構築法

石室は、1号墳同様に調査にあたっては奥壁を除き石室掘方までの完掘調査を行ったので、その構築過程を第34図の墳丘断面図と、第45図により復元しながら進めたい。

また、2号墳は玄室部と羨道部の区分が曖昧な無袖(式)で、構造的には一つの石室と全く変わらないものである。このことは、盛土の一工程である墳丘内石敷でも確認でき、玄室部と羨道部は同時に作られていた可能性が高い。よって、以下には玄室部と羨道部を構築順に記述せず、同時並行で施工されたものとして記述する。

#### (1) 尾根の削平と平場作り

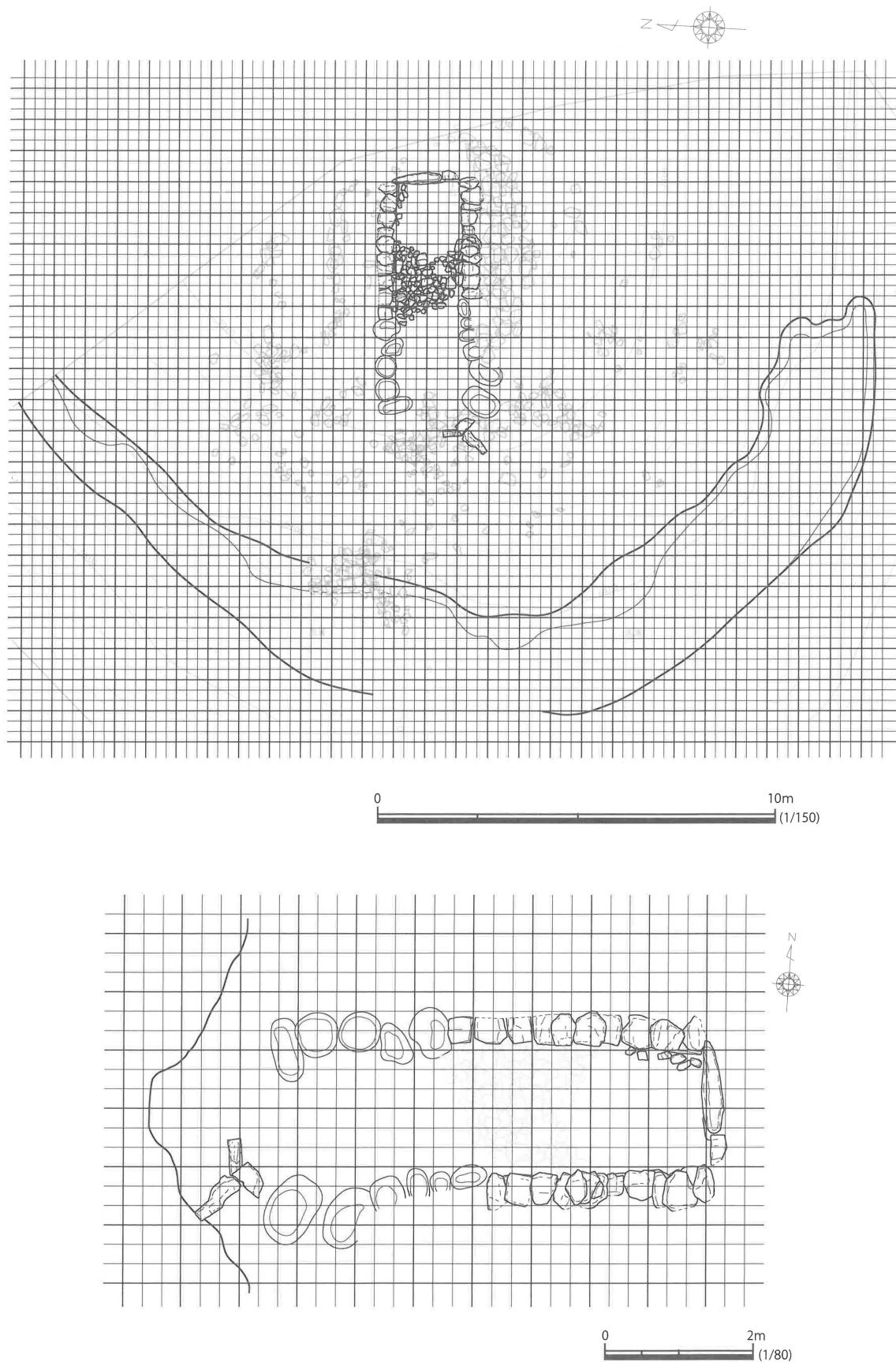
2号墳を構築するにあたっては、尾根の傾斜地変換点上部に石室を構築するという用地の選定後に、墳丘背後東側の標高71.0m付近から石室床面までの70.6mまでの範囲、東西長約15m、南北幅約11mにおいて、20-1層・風化チャートの岩盤を0.4m余り削平して平場を作ることから始まったと考えられる。この結果、羨道部から玄室部の南側にかけては、一部チャートの岩盤が露出した状態となった。この削平工程では、盛土による整地は確認できていない。

#### (2) 石室掘方と排水溝の設置

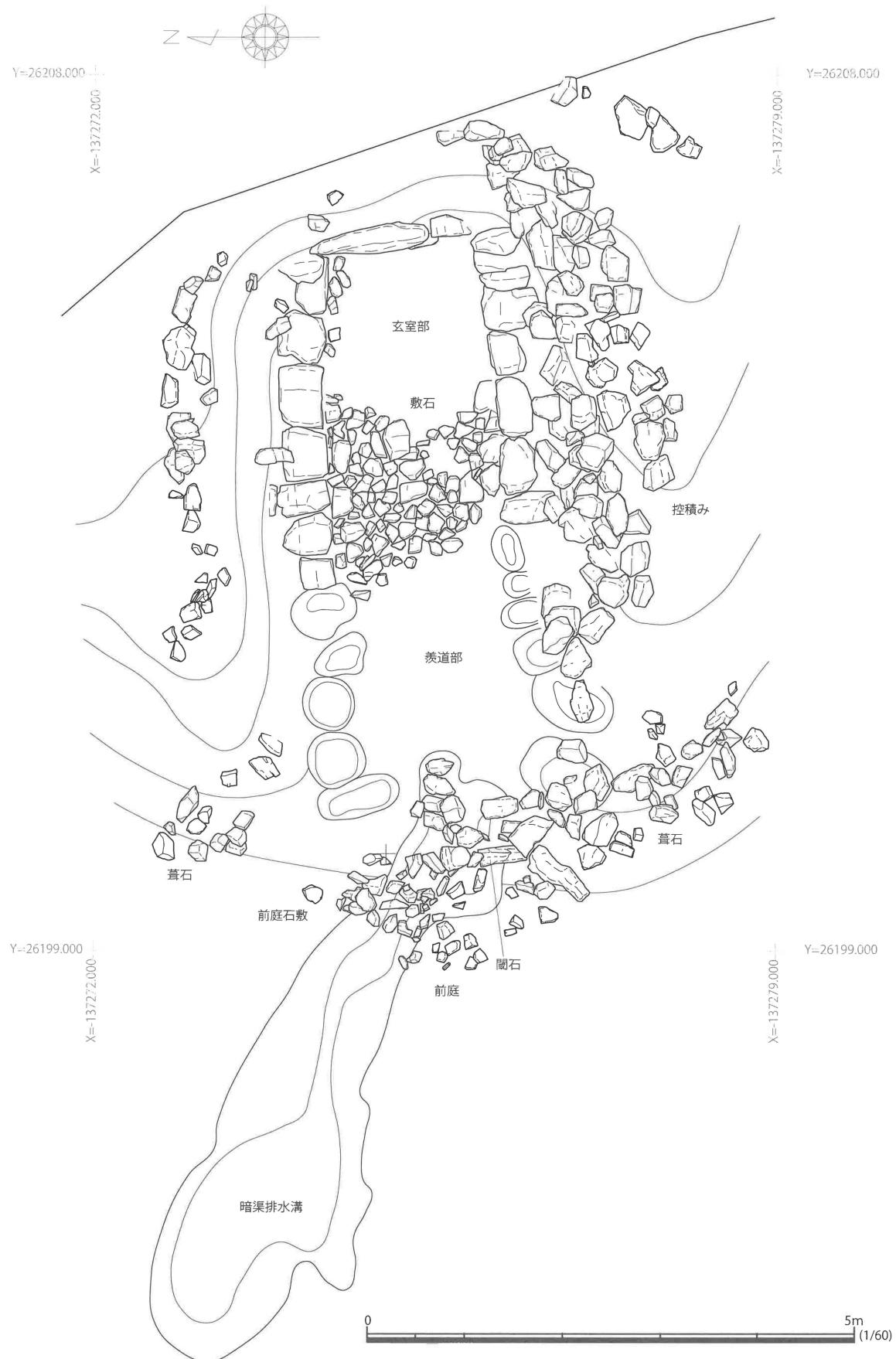
石室を構築するにあたっては、平場作りが終了し平地となった用地において、墳丘と石室の位置決めが行われたと考えられる。位置決め後には、石室を納める墓壙の掘削工程が始まる。墓壙である石室の掘方は、2段階で行われている。第1段階は削平した平場に、前庭開口部までの長方形の石室掘方を行うもので、第2段階はそこに暗渠排水溝を設けて上部に盛土整地して石室掘方を完了する。1号墳のように暗渠排水溝を框石まで埋め戻して、玄室部を一段下げた墓壙とはしていない。

#### 〔石室掘方〕

第1段階の石室掘方規模は、奥壁の後ろから前庭までの東西長8.1~8.4m×南北約3.4mの長方形で、斜めに掘り込まれている。床面の高さは、奥壁際が標高70.3m前後、玄室部床面が標高70.23m前後、玄門部分推定付近で標高70.21m前後、羨門部分推定付近で標高70.15m前後、闕石付近で70.1m前後であり、掘方床面は平滑に仕上げられている。石室掘方の深さは、奥壁背後が最も深く0.4mで、全体には0.1~0.4m余りと浅い。



第44図 稲荷山2号墳石室・墳丘基準尺度割付図



第45図 稲荷山2号墳1次床面・敷石・暗渠排水溝・控積み図

### 〔暗渠排水溝〕

暗渠排水溝は、石室内の排水を目的として、羨道部・前庭から西側斜面にかけて作られた溝である。

その位置は、第45図の様に羨道部内の羨門推定部分の中央から闕石下を通り前庭の半ばくらいでN-63°-W方向に屈曲し、西側墳丘斜面下の周溝にまで達する。その規模は、延長が6.8mで、前庭端までの幅は0.66~1.0mであるが、墳丘裾部では広くなり1.44~2.05mまで広がっている。暗渠排水溝の深さは、0.28~0.7mと1・3・4号古墳中で最も深い。

溝内の石は、羨道部の入口部分と前庭上の敷石以外にも、埋土層である12-1~4層中に、0.1~0.3m台の角礫が排水溝の西端最終部分に多数含まれていた。溝内からの遺物の出土はない。

なお、溝幅が広く深いことから、石室構築時には排水溝を兼ねた作業段階として使われた可能性が高い。

### (3) 石室の構築

1号墳においては、墓壙中央に後に玄室部床面となる部分を掘り残した高まりが作られたが、2号墳においては床面を溝状に下げて基底石を据え置くことはなく、第45図の様に1石毎に浅めの掘方をもって基底石を据え置く。また、基礎地業も無く、掘削した20-1層上面に基底石を直接置き、隙間に礫を詰めて調整しながら固定している。各基底石の固定順序は、奥壁→玄室部・羨道部両側壁→闕石→前庭縁石の順である。

なお、2号墳では石積が殆ど残存していないため、石積ライン（目地）の観察も不可能であるため、残存する各壁の石積の状況と裏込め盛土の関係について記述する。

### 〔奥 壁〕

石室の最も奥の正面に据えられた石材で、残存するのは最下段の2石である。この内、北側の1石は残存する石材の中では最も大きな石である。

石使いは、長辺1.26m×短辺0.81m×厚さ0.28mの平らな長方形の板石を、長側面を横向きに倒し、平らな面を玄室部内に向けて立てた横使いである。底辺を北側の右側壁側に、先端を南側の中央に置く。もう1石は、長辺0.67m×短辺0.48m×厚さ0.23mの平らな長方形の板石を、縦方向に立てた縦使いである。この2石の下には、長辺0.34m×短辺0.18m×厚さ0.13mの石材で受け、間詰め石1石を入れて2石で高さを調節している。

この奥壁に用いた石材は、極めて小さなものであり、そのまま石室規模を表しているように思われる。

### 〔右側壁〕

右側壁は、基底石が奥壁から7石までが残り、2段目は4石が残る。

11石の内で最大のものは奥壁から1石目の長辺0.61m×短辺0.33m×厚さ0.28mで、最小は奥壁から7石目の長辺0.35m×短辺0.34m×厚さ0.16mのものである。残り11石の内、長辺が0.5mを超えるものは5石で、0.4m台が4石である。最も高いところで、床面から0.53mまで遺存している。

石使いは、基底石では掘方底面に安定した平らな面を向け、奥壁から1~4石目までは長側面を石室内に向けるのに対し、5石目をからは比較的平らな小口面を石室内に向け、城郭の石垣でいう

ところの野面積み（牛蒡積み）、小口積としている。また、長側面を用いるものは少し大形の石材を用いるのに対し、小口積では小型のものを多用するため、基底石の上面は落差が大きく、4石目と5石目では約0.1mの落差が生じている。2段目では、奥壁から2石目が長側面を用いるが、他は小口積とする。

間詰め石は、殆ど見られなかった。

#### 〔左側壁〕

左側壁は、基底石が6石まで残り、2～5段までに18石が残る。

24石の内で最大のものは奥壁から2石目の長辺0.58m×短辺0.57m×厚さ0.24mのもので、最小は奥壁から5石目の長辺0.52m×短辺0.21m×厚さ0.1mのものである。残り22石の内、長辺が0.6mを超えるものは2石で、0.5m台が3石、0.4m台が11石、0.3m台が6石である。最も高いところで、床面より0.77mまで遺存している。

石使いは、基底石では右側壁と同様で、掘方底面に安定した平らな面を向け、奥壁から2～5石目までは長側面を石室内に向けるのに対し、1・6石目は比較的平らな小口面を石室内に向け、長辺側を奥に入れた野面積み（牛蒡積み）としている。2～5段目は、特に石積ライン（目地）が通ることことは無く、小型の石材を小口積として用いている。

間詰め石は、僅かであった。

#### 〔闕 石〕

羨道部と前庭の境にある闕石は、石室に対して真横に置かれたものが5石残存する。羨道部と前庭に床面の段差は無い。5石の延長は、長さ1.23m×幅0.18～0.28m×高さ0.25～0.31mである。推測される闕石の横幅は、中心軸による復元から約1.8mと考えられる。

羨道部の開口方向は、玄室部と同じ凡そN-94°2'-Wである。

#### 〔玄室部の敷石床〕

玄室部床面の敷石は、本来は石室完成後の遅い時期に施工されたと考えられる。

敷石床は、比較的平らな板石を使った、20層の床面上に平らな一面を上に向けて隙間無く並べ置いたものである。残存するのは玄室部中央の敷石で、102石を確認した。1次床面出土の遺物は、この敷石床の左側壁際から4点の須恵器が出土している。

敷石の大きさは、最大が長辺0.43m×短辺0.22m×厚さ0.1m余りで、最小が長辺0.08m×短辺0.05m×厚さ0.04m余りで、平均的には長辺0.2m×短辺0.15m×厚さ0.07m余りのものを用いている。やや大きな敷石と小さな敷石との差が何によるのかは、明らかでない。

敷石床面の高さは、奥壁際で標高70.38m、中央部で標高70.32m余りであり、緩く開口部に下がる。

#### 〔羨道部の敷石〕

前庭の敷石は、少なくとも闕石内側から約1.23m西側まで現状では見られるもので、西側斜面の崩落を考慮するなら0.3～0.4m長かったと考えられる。この石敷は、先にも記したように羨道部内に入り込む暗渠排水溝の上部にも施工されていて、前庭の縁石際にまで見られることから、一部軟弱な羨道部内と前庭全体に施工されていたものと考えられる。

使用された石材は、平均的には長辺 0.15 m × 短辺 0.1 m × 厚さ 0.08 m 余りのものを多用している。残存する敷石の数は、羨道部内と前庭の 58 石である。この敷石は、玄室部内の敷石床とは異なり、粗い敷き方であって歩きやすさはない。

敷石床面の高さは、闕石際で標高 70.11 m、西側落ち際で標高 69.73 m であり、16°余りの傾斜で下がっている。この部分で墓前儀礼が行われたと考えられる。

#### 4) 石室の裏込め盛土と控積み

石室の石積壁体工程と裏込め盛土工程は、表裏一体で進行する。しかし、2号墳は攪乱が大きく、ここでは石積ライン（目地）の観察ができないため、第1工程である奥壁1段目までの盛土工程と、第2工程の石積である控積み工程の一部を復元してみる。

##### 〔第1工程〕

第1工程は、第1段石積ラインである、奥壁の高さでもある床面から 0.77 m、標高 71.07 m までの作業工程に相当する。側壁石積では基底石を含む、3～4段にあたる。

石室掘方と床面の段差は、奥壁が 20 層上面から 0.25～0.4 m であるが、右側壁では 0.1～0.25 m、左側壁でも 0.2～0.35 m と浅い。これを補うために、まず 7 層で盛土が実施されている。その高さは、奥壁側では標高 71.0 m 前後に、右側壁では 71.1 m 前後に、左側壁では 71.05 m 前後にあり、平均 71.0～71.1 m の高さに、上面平らに盛土されている。この盛土は、奥壁側と左側壁では各層を水平に積んでいるが、右側壁では 7～5 層と 7～4 層の平らな盛土の上に、石室側に厚く 7～3 層を盛土し、石室の外側に向かって 7～2 層を、さらに外側に 7～1 層を盛って、盛土を完成している。この 7 層シルト質細砂～粗砂の中には、小礫（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）は多く含むが、大形の礫は全く含んでいない。

この次に行われたと考えられるのが、石室の位置決めと、奥壁と両側壁の基底石の設置である。この基底石上面に奥壁1石目の上面までの高さに石室の石積が実施される。

##### 〔第2工程〕

その後、7 層の盛土層の上面を、大形の礫（ $\phi \sim 20\text{cm}$ ）を多量に混じえる角礫（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）を含む 6～1 層シルト質細砂層で盛土している。この盛土は楕円形の範囲に行われている。ここでは、この墳丘内に埋没するこの石積を、「控積み」と呼称する。この「控積み」は、調査時には既に上部が表土層下に見られ、その厚さについては分からず。その範囲は第45図からも明らかのように、玄室部においては奥壁内側から 1.3 m 東側まで、右側壁内側から 1.7 m 北側まで、左側壁内側から 2.0 m 南側まで確認される。羨道部では、攪乱のため石敷の残りが悪いが、一部散見されるので施工されていたものと思われる。よってその範囲は、楕円形の東西約 7.0 m × 南北約 5.2 m の範囲である。

この「控積み」は、東三河地域で「半積石塚」といわれるもので、4号墳がこの構築法である。

#### 5) 石室内の利用と出土遺物

墳丘及び石室の完成後には、その目的である石室内への埋葬が執り行われたと考えられる。検出された石室内は、敷石床面上まで舐めたように攪乱されていて、これを逃れた側壁際下の一部遺物

群が残るのみである。これを1次床面の出土遺物群とする。

#### 〔堆積層〕

敷石床上の堆積及び敷石間の堆積は、僅かに攪乱を逃れた部分で確認されたが、石室内の大部分は8層の攪乱流入土か攪乱後の埋土である。完形品に近い出土遺物は、敷石床に付くか僅かに浮いている状態で出土しており、最終埋葬時まで玄室部内への流入土はほとんど無かったことを示す。この堆積土は、敷石間堆積土層である10-1層で、角礫( $\phi \sim 2\text{cm}$ )を含む細砂質シルトである。

この上部に堆積する石室内堆積土である9-1層は、大形の礫( $\phi \sim 20\text{cm}$ )を多量に含むシルト質粗砂層である。この層の堆積段階で既に石室内は開口しており、多量の土砂が流入したものと考えられる。

#### 〔出土遺物の種類と配置〕

1次床面の玄室部と前庭より出土した遺物の配置を、第46図に示す。

出土遺物の種類は、敷石床上から須恵器の平瓶1点、壺蓋2点、壺身1点が、金属製品には前庭の敷石間から鉄製轡引手1点と、玄室部の敷石間から811～813鉄鏃が出土している。この内、鉄鏃の811と812は、床面堆積土の洗浄で出土したものである。

#### 〔土器の出土状況〕

左側壁際の敷石床上面から出土した土器群である。

全て須恵器で、4点共に完形品である。壺Gの701壺蓋と702壺蓋を上下に重ね、横倒しの703壺身の中に入れた状態で出土した。この内702壺蓋と703壺身は、口径や出土状態からセットと考えられる。021平瓶は、壺身壺蓋の西側約0.2mにおいて、敷石上で横倒しの状態で出土した。

この他に石室内2S区において攪乱層からの出土ではあるが、元位置に近い可能性があると思われる705甌が出土している。

#### 〔金属製品の出土状況〕

これらの金属製品をA～Cの3群に分ける。

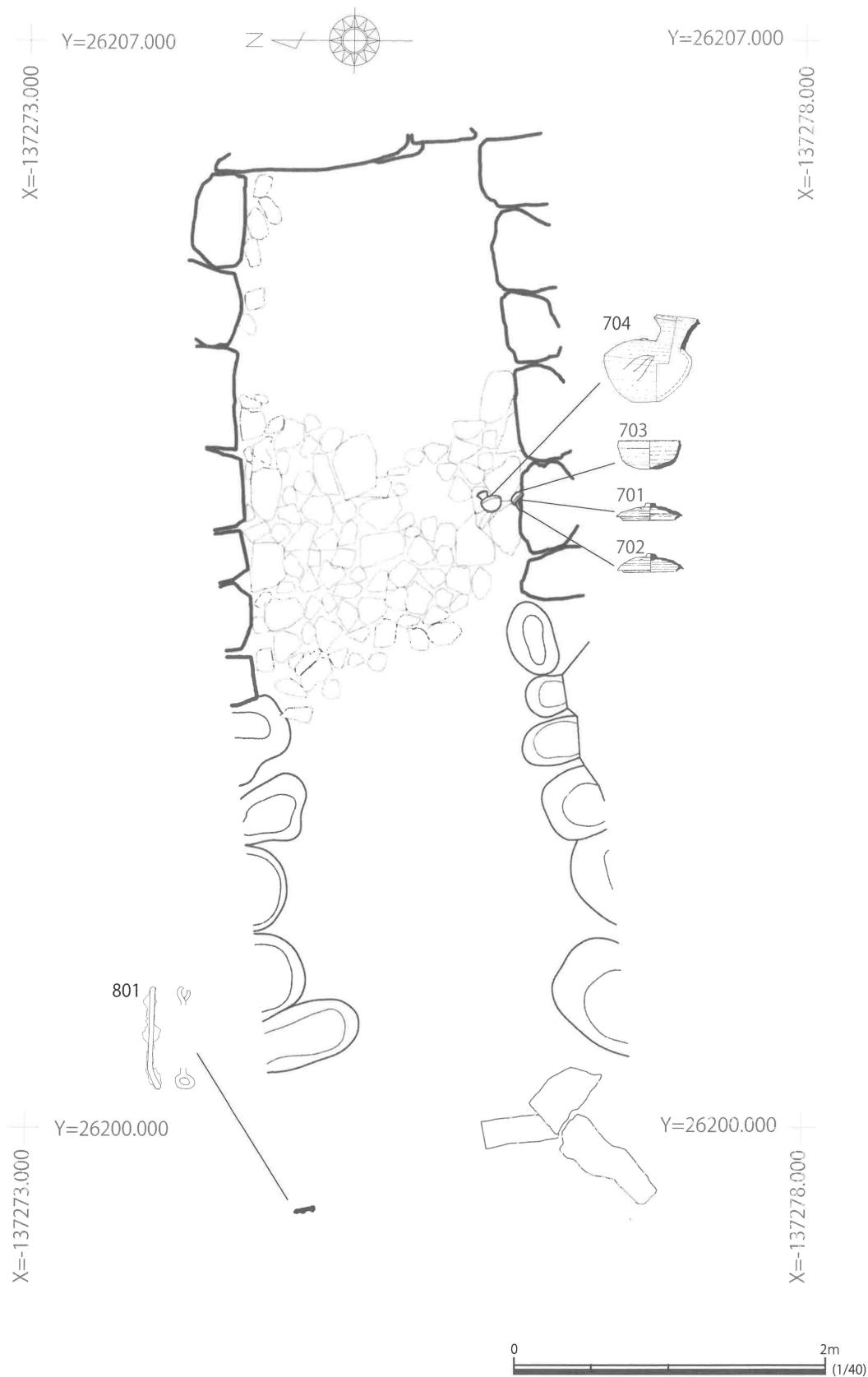
A群は、床面攪乱埋土である8-3層の洗浄により出土したもので、玄室部奥壁南側の1S区から出土した2点からなる鉄鏃群である。攪乱層からの出土ではあるが、元位置に近い可能性があると思われる。811の鏃型式は有頸有茎鉄鏃で、広根系の脇挟長三角形である。812は811の頸部破片と考えられるものである。

B群は、玄室部奥壁側の1N区敷石間の10-1層から出土したもので、813の鏃型式は有頸有茎鉄鏃で、広根系の頸・茎部の破片である。

C群は、闕石西側の前庭4N区敷石上の11-1層から出土した、801鉄製轡引手である。

#### 〔羨道部の閉塞〕

石室の閉塞は、羨道部において実施されたと考えられるが、閉塞に伴う石積はその痕跡を一部に残すのみで、その範囲を確認することはできなかった。また、この閉塞石内からの遺物の出土はない。



第46図 稲荷山2号墳1次床面遺物出土状況図

## 第4節 出土遺物

出土遺物は、主に石室内の1次床面の出土遺物と墳丘の出土遺物に分かれる。各遺物の実測図を第47-1・2図に、各遺物の数値や成形調整手法等を第7表に示す。

### 1) 1次床面

1次床面からは、土器には須恵器の701・702 坯蓋、703 坯身、021 平瓶が、金属製品には811～813 鉄鏹、801 鉄製轡引手が出土した。

#### (1) 土器

##### 〔須恵器〕

###### 坯 蓋 (701・702)

坯蓋は701・702の2点で、坯Gの返り蓋である。完形品である。

701は口径7.4cm×器高2.5cm、702は口径7.5cm×器高2.7cmで、口径は小さく、天井部は平坦で低く、強いヨコナデ調整が行われ、先端には明瞭な面を作る。返りは天井部内側先端から大きく外傾して外反し、天井部より下に出る。口縁端部は薄く、尖り気味に仕上げる。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1／3～1／2で、天井部の厚みは薄い。摘み（鉗）は702では上面を平にし、701では上面を僅かに窪めたもので、擬宝珠や鉗のような形状ではなく扁平な台形状である。701・702共に手擦れがなく、未使用品と思われる。また、口径や出土状態から703 坯身に702 坯蓋がのるセット（対）と考えられ、その調整法や胎土もよく合致している。湖西窯を含めた在地産と推定される。

###### 坯 身 (703)

坯身は703の1点で、坯Gの身（碗）である。完形品である。

703は口径8.6cm×器高4.2cmで、回転ヘラケズリによる底部から急激に外傾しながら立ち上がり、口縁部近くで幅の狭い小さな凹部とその上部に凸部を巡らし、やや内傾して口縁端部にいたる盤形の坯身である。口縁端部には幅の狭い面をもつ。底部の回転ヘラケズリの範囲は狭く、底部の厚みは薄い。701・702同様に手擦れがなく、未使用品と思われ、新調された品物である可能性が高い。湖西窯を含めた在地産と推定される。

###### 平 瓶 (704)

平瓶は704の1点で、完形品である。

704は口径5.8cm×高さ12.6cmで、長頸壺の体部上半の中心を外した上面に、口頸部を付けた形状である。体部の高さは9.0cmで、最大径は底部から2／3余りの位置にある12.7cmである。最大径よりも上部まで、回転ヘラケズリによる調整が行われる。底径は3.7cmで、ヘラケズリで平底に調整されている。口縁部は斜め上方に開き、端部を上方と下方につまみ、その間を窪めるもので、直下に強いナデにより突出度の低い段部を作り巡らせる。体部の中央上部に、1個のみ円形鉗状の耳を付ける。また、体部側面には、「ヨ」形のヘラ記号を付ける。調整法などから、湖西窯を含めた在地産と推定される。

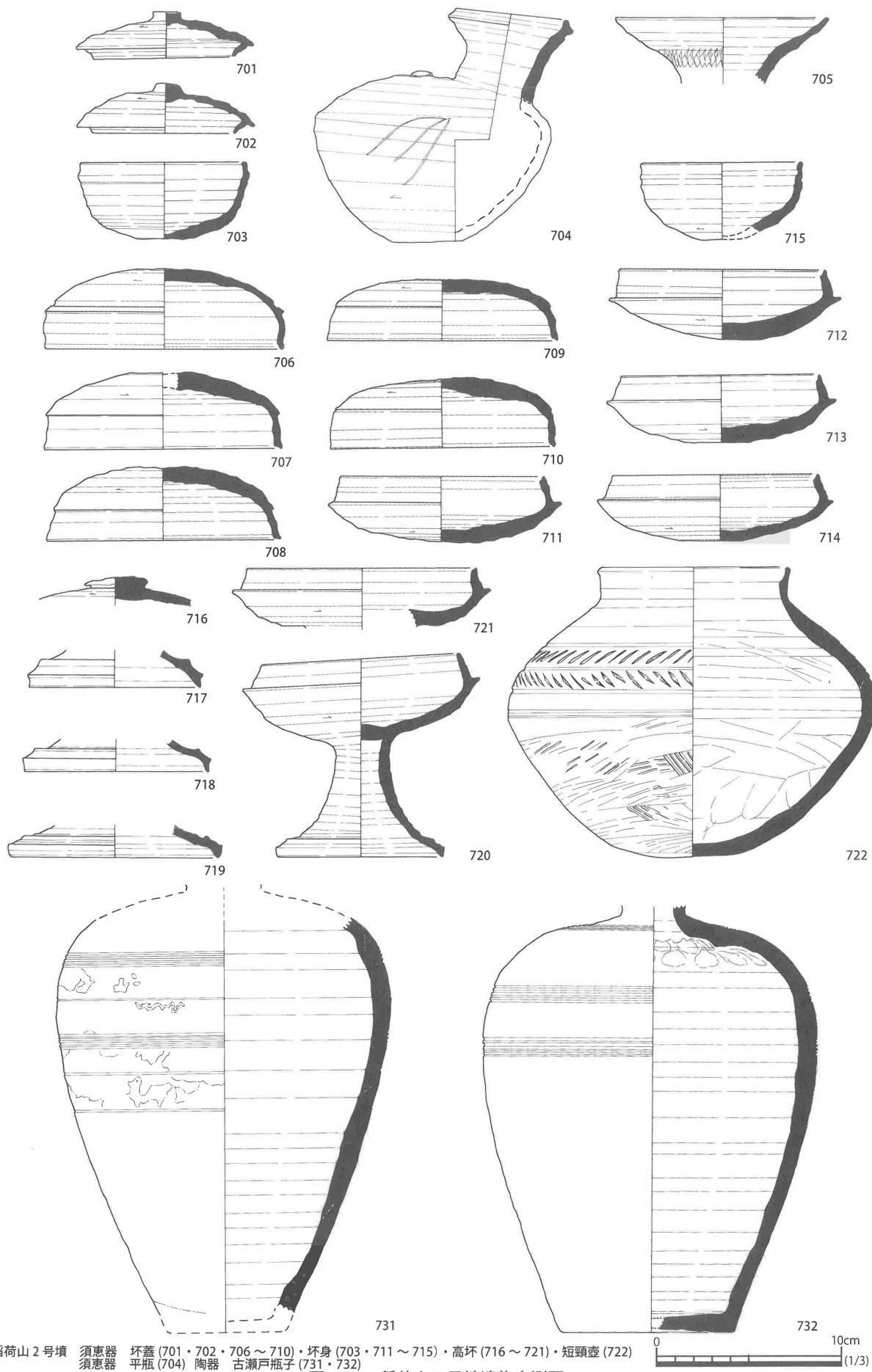


図47-1 稲荷山2号墳遺物実測図

## (2) 金属製品

## [轡]

馬具の轡引手が1点出土している。内環の一部を失うが、ほぼ完存する。

801(轡3)は、金属製品C群から出土していて、鉄製の引手である。引手は、壺の付け根をくの字に屈曲させるくの字引手で、引手長(16.6)cm、引手内環は外径が2.2cm、引手外環である壺は外径が3.1cmで、断面は $0.7 \times 0.7$ cmの隅丸方形を作る。引手の環接合は、引手内環が伸ばした部分を蕨手に折り返す折り曲げ成形によるもので、引手外環である壺は鍛造による折り返し成形によるものである。

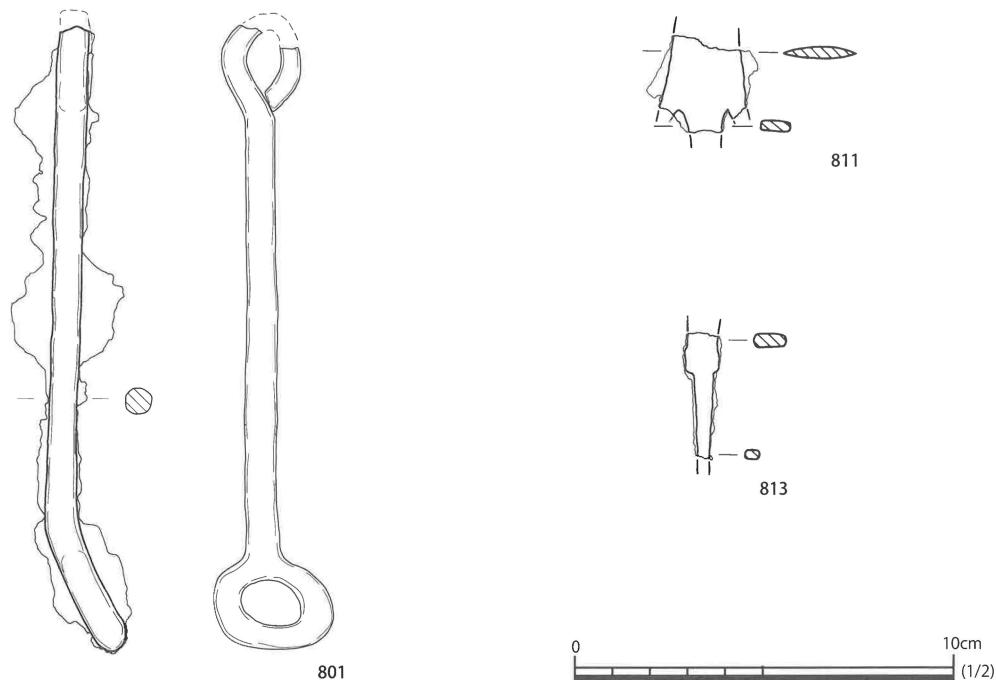
## [鎌]

鎌は3点出土していて、全て鉄製で破片である。

811・812は、金属製品A群の床面攪乱埋土である8-3層の洗浄により出土したもので、玄室部奥壁南側の1S区から出土した鉄鎌群である。811の鎌型式は有頸有茎鉄鎌で、広根系の腸抉長三角形鎌である。812はこの個体の頸部破片と考えられるものである。811の形状は、鎌身断面形状は両丸造、関形状は不明、頸部形状は棒状、頸部断面形状は長方形、頸部関形状は不明、茎部断面形状も不明である。

813は金属製品B群から出土していて、鎌型式は有頸有茎鉄鎌で、広根系の鎌の頸・茎部破片である。813の形状は、頸部形状は棒状、頸部断面形状は長方形、頸部関形状は角関、茎部断面形状は長方形である。

2号墳では、1号墳で多かった柄部が長く鎌身頭部が小さい細根系が見られず、鎌身頭部が大きい広根系の破片が僅かではあるが見られた。



稻荷山2号墳 鉄製轡(801)・鉄鎌(811・813)

図47-2 稲荷山2号墳遺物実測図

## 2) 石室内・西側周溝上石敷遺構下層 SX01

石室内・西側周溝上石敷遺構下層 SX01 から出土した遺物には、須恵器の坏身、坏蓋、甌、短頸壺、甕がある。

### (1) 土 器

#### 〔須恵器〕

##### 甌 (705)

075 は口縁部のみの破片で、口径は (11.6) cm に復元される。ラッパ状に開く口縁部は、屈曲部の段が不明瞭で、沈線や明瞭な稜は作らない。緩い段の下に 1.2cm 幅の板状工具による波状紋を描く。口縁端部は、丸く仕上げ内面も回転横ナデにより調整する。湖西窯を含めた在地産と推定される。

##### 坏 蓋 (707 ~ 710)

坏蓋は 707 ~ 710 の 4 点で、707 を除き完形品に復元できた。

707 は口径 (12.8) cm × 器高 4.1cm、708 は口径 (12.6) cm × 器高 3.9cm、709 は口径 (12.3) cm × 器高 3.3cm、710 は口径 12.1cm × 器高 3.7cm で、709 の天井部は扁平であるが、707・708・710 は天井部に丸みを持ち、707 ~ 709 の稜部は天井部との境に明瞭に段をなすが、710 では凹線状に丸みをおびる。口縁部はほぼ真っ直ぐに下がる 707・710 と、外傾して僅かにハの字に広がる 708・709 がある。707 ~ 710 には口縁内面に、同様な内傾する面をもつ。器壁はどれも厚い。天井部のヘラケズリの範囲は 2 / 3 と広い。707 ~ 710 には全て逆位焼成痕がみられる。湖西窯を含めた在地産と推定される。

##### 坏 身 (711 ~ 714)

坏身は 711 ~ 714 の 4 点で、713 を除き完形品に復元できた。

711 は口径 11.0cm × 器高 3.6cm、712 は口径 11.0cm × 器高 3.8cm、713 は口径 (10.8) cm × 器高 (3.6) cm、714 は口径 11.1cm × 器高 3.5cm で、底部は扁平で丸みが少なく、受部は水平に引き出される。口縁部は何れも内傾又は緩やかに内彎するもので、端部内面に内傾する面をもつ。器壁はどれも厚い。底部の回転ヘラケズリの範囲は、2 / 3 と広い。711 ~ 714 には全て逆位焼成痕がみられる。湖西窯を含めた在地産と推定される。

##### 短頸壺 (722)

短頸壺は 722 の 1 点で、完形品に復元できた。

722 は口径 9.9cm × 高さ 15.7cm で、口径 13.6cm の蓋の痕跡を体部上半に残すことから有蓋短頸壺である。しかし、これに伴う蓋の出土はない。体部は肩の張らないもので、最大胴径 19.6cm は頸部から底部までの中位にある。底部はヘラケズリしてやや平らな丸底とする。口縁部は体部から 2.0cm 直立するもので、端部には外傾する端面を作り、先端を尖り気味に作る。口縁内側に幅の広い凹面が 1 条巡る。器壁は比較的薄い。体部外面下半は、平行条の叩きの後にナデにて調整する。体部内面下半は無紋圧痕をナデ調整する。体部上半は内外面共に、回転ヨコナデとする。体部の最大径のところに 2 条、その上部に 1 条ずつ 3 条の沈線を巡らし、その 3 条の間にクシによる斜め連続刺突紋を羽状に施す。生産地は不明であるが、口縁の特徴や胎土から、猿投窯系と推定される。

### 3) 墳丘南西側斜面

墳丘・周溝の出土遺物で、特に墳丘南西側斜面から出土した遺物には、須恵器の壺蓋、壺身、有蓋短脚無窓高壺、有蓋高壺蓋、有蓋高壺、高壺脚部等がある。

#### (1) 土 器

##### [須恵器]

###### 壺 蓋 (706)

壺蓋は 706 の 1 点で、壺 H の蓋である。

706 は口径 (12.8) cm × 器高 4.3cm で、天井部は丸みをもち、稜部の手前で深いナデを作つて段をなす。口縁部は丸く内彎しながら端部で屈曲して外傾する。端部は丸く收める。口縁内面には屈曲部に凹面を一巡させるが、大きな段とはならない。器壁は全体に薄い。底部の回転ヘラケズリの範囲は、1 / 2 余りである。猿投窯系と推定される。

###### 壺 身 (715)

壺身は 715 の 1 点で、壺 G の身（碗）である。底部を欠く。

715 は口径 8.7cm × 器高 (4.2) cm で、回転ヘラケズリによる底部から外傾して立ち上がり、さらに口縁部近くで真っ直ぐ立ち上がる。703 壺身と同じように口縁部近くで幅の狭い小さな凹部とその上部に低い凸部を巡らし、口縁端部にいたる盤形の壺身である。口縁端部は丸く收める。底部の回転ヘラケズリの範囲は狭く、これにより底部の厚みは薄い。701 壺蓋とセットになつてゐた可能性が高いものである。石室内の 701 ~ 703 同様に手擦れがなく、未使用品と思われる。湖西窯を含めた在地産と推定される。

###### 高 壺 (716 ~ 721)

高壺は有蓋高壺の蓋が 1 点、有蓋短脚無窓高壺が 1 点、有蓋高壺の壺部が 1 点、高壺の脚部が 4 点の 7 点である。

716 は有蓋高壺の蓋と考えられるもので、壺蓋の可能性もある。壺の回転ヘラケズリされた器壁の薄い天井部上に、厚みのない薄い宝珠形の鉢を付ける。鉢の径は 3.3cm × 高さ 0.6cm である。猿投窯系と推定される。

717 は脚径 (9.2) cm、718 は脚径 (9.9) cm、719 は脚径 (11.2) cm の高壺脚部である。脚部は円柱部から裾広がりに広がるが、717 は裾広がりが少ないので、一段の段部を作り垂下する端面を作る。718 はさらに裾広がりとなり、一段の段部を作り垂下する端面を作る。719 は裾部の端部に作る面が丸く退化し、内面の押さえも弱いものである。猿投窯系と推定される。

720 は口径 (10.6) cm × 器高 (11.0) cm で、有蓋短脚無窓高壺である。壺部は (4.5) cm の深い彎曲する底部で、受部は水平に引き出される。口縁部は僅かに内傾して、端部は丸く收める。器壁は脚部も含め、比較的薄い。底部の回転ヘラケズリの範囲は 2 / 3 余りで広い。脚径は 8.9cm で、脚部の高さは 6.5cm である。脚部に透かしはなく、円柱部から裾広がりに裾部になり、低い断面三角形の段と、その外面を内傾させる断面三角形の端面を作る。猿投窯系と推定される。

721 は口径 (12.3) cm で、有蓋高壺の壺部でやや焼け歪みが見られるものである。底部は扁平で、

受部は底部との境に強いヨコナデを行って水平にする。口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部内面に内傾する面をもつ。器壁は厚い。底部の回転ヘラケズリの範囲は、受部近くまで及ぶもので広い。湖西窯を含めた在地産と推定される。

#### 4) 西側周溝上石敷遺構上層 SX02・墳丘北西斜面

西側周溝上石敷遺構上層 SX02 と墳丘北西側斜面から出土した遺物には、陶器の瓶子がある。

##### (1) 土 器

###### 〔陶 器〕

###### 瓶 子 (731・732)

古瀬戸の瓶子が 2 点ある。

731 は最大胴径 (18.0) cm、頸部径 (4.0) cm、頸部までの胴部高 (24.0) cm、底径 (6.2) cm で、古瀬戸灰釉の瓶子 II 類である。体部の肩から口縁部と底部を欠く。最大胴径は、胴部高 (24.0) cm の上から 1 / 4 余りのところにある。丸い肩の張った体部から最大胴径、最大胴径からさらに直線的な裾となるものである。胴部は円盤状の底部の上に接合されていたようで、底部と分離する。肩部から最大胴径より下にかけて、 $\alpha + 4$  条 + 1 条 + 4 条 + 1 条 + 1 条の沈線が巡る。瀬戸窯産。

732 は最大胴径 (19.8) cm、頸部径 (3.4) cm、頸部までの胴部高 (22.6) cm、底径 (9.4) cm で、中国磁器の梅瓶を模した古瀬戸灰釉の瓶子 II 類である。口縁部を欠く。最大胴径は、胴部高 (22.6) cm の上から 1 / 3 余りのところにある。肩の張った体部から直線的な裾となる。底部は 731 より大きく、未調整である。頸部から最大胴径までの肩部に、4 条 + 5 条 + 5 条の沈線が巡る。瀬戸窯産。